

# 日本列島における都城形成

——大宰府羅城の復元を中心に——

阿 部 義 平

- 
1. はじめに
  2. 倭の京まで
  3. 大宰府の復元  
——羅城と山城のある都城の追求——
  4. 小論の結び
- 

## 論文要旨

日本列島中央部に形成された倭国は日本とよぶ中央集権国家に発展していくが、その過程で同一の国家でありながら10余の京——都城を形成し、変遷を重ねた。その内には条坊式の方格地割をもつ都城が5例ある。これらは中国の都城を制度として継受して造られた。ではそれ以外の都城はどんな実態で、都城全体はどう形成されてきたのか。条坊式都城より非条坊式都城が先行して出現するだけでなく、併行して営まれたものもある。非条坊式都城は副次的に把えられてきたが、かえって国家権力の本質や日本での都市の骨格を示すとみることでもできると考える。

非条坊式都城は、ほぼ7世紀代の100年間、倭の飛鳥に営まれた倭京（やまとのみやこ）から始まる。宮殿や豪族邸宅や寺、饗宴のための苑池、防備施設などが広大な地域を占めていた。650年代からは山城などの防備の中核施設も領域内に営まれたとみられる。このような防備された都市として最も典型的なのが九州の大宰府である。大宰府は朝鮮半島の三国の都城の重要な要素を継受し、亡命百済人の手で造営が指導された。その水城、小水城、山城、政庁、都市部分が発掘されている。しかし羅城は西側に認められるだけで、全貌は明らかでなかった。羅城南辺に当るとうれぎ土塁の発見により東側にも西側と同原則で羅城が復元できることが判った。その羅城内は郭と呼ばれ、正南北方向の地割をもち、左郭・右郭・南郭に分けられていた。南郭には条里が施行された。左・右郭の条坊も朱雀大路などの設けられた奈良時代前半ころには存在し、後に郭の中央部では10世紀に大規模な都市再開発がされたことも判明してきた。大宰府は朝鮮半島の都城よりも雄大な構想をもつもので、宮が遷されたことがないので京とは呼ばれないが、都城の一形態と評価できる。自然地形も最大限に利用した都城の型式は、畿内の都城を点検する上で原点となる。都市城壁をもたないとされてきた日本都市の歴史をも再考させるものである。

## 1. はじめに

日本古代の宮室都城の研究は、統一国家の形成過程とほぼ対応する時期の国家中枢のあり方を、制度と実態から解明するものとして意義付けられてきた<sup>(1)</sup>。近年発見された居館や数多い古墳の分布に示されるような在地の権力を基盤とする古墳時代に対して、その後に登場する中央集権国家は、中国の国家運営の経験が集約された律令制度を継受し、宮を核にして支配層が集住する都城の形成をもたらしたとされる。都城は古代の代表的かつ最初の都市として、制度的には都城制として扱えられるに至るが、制度の研究と合わせて、造営を可能にした技術や労働力編成、官衙空間から市民生活に至るまで、都城の全体像が学際的に復元されようとしている。そして制度的に完成した都城以前のあり方も問われるに至った。都城の発掘調査は、1930年代の藤原宮中枢部の計画的調査などを先駆とし、1960年代から主な都城で相前後して宮中枢部が調査され、現在では関係者の努力により10近くの都城で継続的調査が実現し、調査も都市としての様々な部分に及んできた。その成果も一般に公開され、関心が高まってきたといえよう<sup>(2)</sup>。日本の都城の特色には、2世紀ほどの間の形成過程で10余の京——都城を形成し、変遷を重ねた点もあるが、その形成の初めから都市城壁を欠くという点も指摘されてきた<sup>(3)</sup>。天武朝に難波に羅城を築いたと記されているにもかかわらず、その実態が不明で、後の都城で外周にあるべき羅城が南辺の形ばかりの築垣を実態とする点などから立論されてきたのだが、羅城がなければ都城と呼ぶことは最初から問題を含むことになる。日本での都城史では、まず最初に7世紀に飛鳥に営まれた諸宮とそれによって次第に形成された倭の京を前史におき、律令制の一部として中国の都城を手本として受け入れた条坊呼称をもつような方格地割の都城、水田地割と異なる地割による計画都市に注目し、その完成への過程として記述されることが多かった。都城は都市の出発点としても評価されるので、都市の形成は東アジアの条坊式都城との比較や、西洋の古典古代都市などと比較して、都市の基盤の未熟さなどが言及されるなど、日本の古代都市——都城の権力的創出というような視点から見られてきたのである。飛鳥の諸宮以前に遡る宮や居館などでの祭政の実態やそれをとりまく集落など、権力の核の形成と集住現象の発達はこれまで注意されてきたが、それでも飛鳥以前の例えば歴代遷宮といった事象から条坊式の都城までを日本列島の諸条件下で跡づける視点はあまり豊かでなかったように思われる。発掘された宮や都城の遺構からは、集落研究などとも対比した都市の客観的把握の視点が当然生じるし、発掘結果を総括した研究により、都城制の意義は今後さらに成果と課題が見こまれてくる。

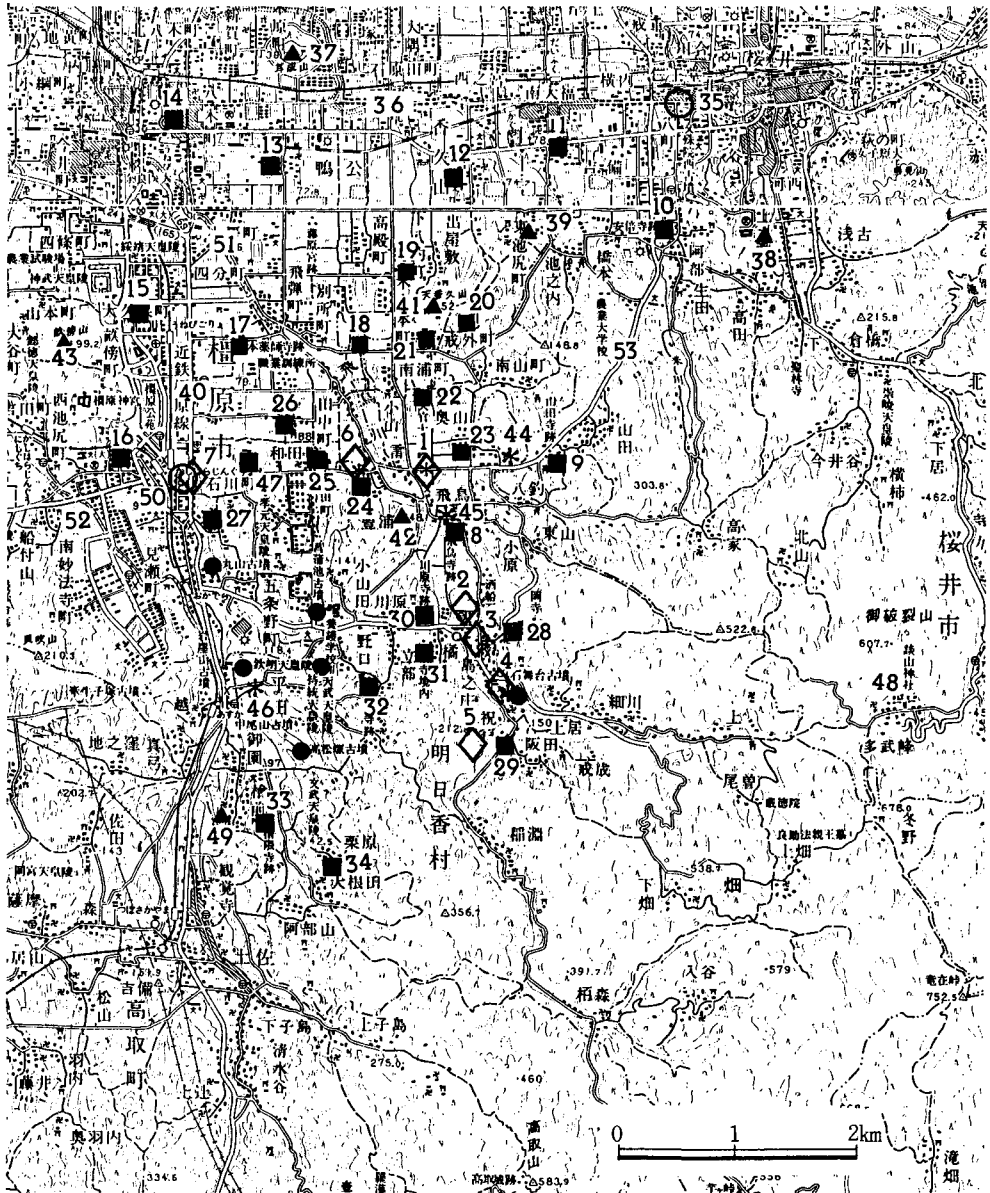
小論はかかる都城研究の成果を点検し、羅城を伴うと報ぜられる大宰府を含め、都城研究成果を条坊制の日本列島での創出過程や防備施設の視点から見直してみたいと考える。大宰府の羅城研究はそこに存在する山城や郭とよばれる条坊式の地割とともに、朝鮮半島の都城との関

連も注目されるもので、予想しなかった大規模な都城としての実態的存在を立証できるのでないかと考える。また同時代の畿内の都城においても、いわゆる条坊式都城以外の都城も列島内の都市一都城として、大きな流れを復元できるかもしれない。さらに条坊式都城の成立についても、日本での形成の実態には複雑な試行の歴史もあり、その形成の理念もまた別に掘り起こされる可能性がある。小論には自前の発掘成果は全く含まれず、これまで各都城等で調査研究した成果に基づき、その検証によって立論するもので、正しい理解に達していない点も多いかと思われるが、少しでも新しい視点を切り出すことができれば幸いである。今回は第3章の大宰府の検討で小結を付し、畿内の各種都城などについては続篇でふれることとしたい。

## 2. <sup>やまと</sup>倭の京まで

城郭が当初は存在せず、その後形成されたかどうか不確かながら、京一都として最初に説明されてきたのは飛鳥に営まれた倭の京である。この京は後出の諸京の原点というべき内容と経過を有しているものと考えられるので、まずこの京について現状の成果の把握と展望を行う必要がある。西暦592年に推古天皇が豊浦宮で即位してから約100年間、宮は飛鳥の地域を点々と移りながらもこの地に続けて営まれた。この京は孝徳朝に難波、天智朝に近江、斉明朝に筑紫の朝倉に宮を遷した時期も含めて、京や都、あるいは古京や倭京として持続的に発展してきたものとみられる<sup>(4)</sup>。この倭京は、壬申の乱には争奪戦の対象となった要地で、京内の衢が望見されてもいる。また天武朝には京内24寺などの記述から京としての広がりをもっていたことも判る<sup>(5)</sup>。倭の京に関連するとみられる主要な遺跡の調査成果をあげると、図1にみるように、飛鳥寺をほぼ中央に置く飛鳥の地は、山地と丘陵や丘に区切られる形で飛鳥川に沿う南北2キロほどの平地を中心としている。飛鳥寺の北方は大官大寺との間に、南は川原寺や橋寺までの間に宮殿遺構の重複が知られ、北方の雷丘東方遺跡は推古朝以来の小治田宮の一部に当ることが判明した<sup>(6)</sup>。また谷あいの地に至るまで建築遺構や庭園の施設が認められた所もある。これらの飛鳥の中心地から、畝傍山方面へ西方2キロほどまでの平野と丘陵が接する地区にも宮が営まれたことも知られている<sup>(7)</sup>。飛鳥時代創建の寺院はとくにこの周辺に集中し、寺を営みうる豪族層を集合させる条件が働いていたとみる見方もある<sup>(8)</sup>。次々に営まれる宮やその維持、皇子宮や豪族邸宅の造営、寺院の林立が特異な空間を形成していた可能性がある<sup>(9)</sup>。しかしこの倭京の範囲や全体像、制度的裏付けについては、若干の説はあるものの不明な点が多い。そこで、大局的な把握を試みると、飛鳥寺やその西の槻木の広場、その南の酒船石遺構などの復元地やその北の須弥山石が掘り出された石神遺跡あたりからみて、南方の谷あいに池等を伴う島之庄の遺跡、南東2キロほどの桧前の地の一郭にある平田キタガワ遺跡でも苑池が認められている。こ

こは飛鳥に至る入口に当ることも注目される。飛鳥の中心地から東北方へ3キロほど、丘陵間<sup>(11)</sup>



1 飛鳥周辺の主要遺跡等地図

の山田道を抜けると阿部の地に至る。この付近に庭園を伴う上之宮遺跡<sup>(12)</sup>があり、海石榴市をこの付近の大道の交点にあったとみる見方がある。飛鳥西方での大道交点付近の軽市と同様に、市が都市的の広がりやその境として重要な地点をなした可能性があろう。さらに、小規模な庭園施設も各所にみられている。加えて軍事的な施設を追ってみると、大化改新前の皇極3年(644)に蘇我氏は京内での緊張に備え、甘樞岡に上宮門、谷宮門を並び建て、家の外に城柵を作り、門の傍に兵庫を設け、火災に備え、兵士をおいた。さらに畝傍山の東に家を起こし、池をほっ

1 雷丘東方遺跡・ 小治田宮跡	15 大窪寺跡	29 坂田寺跡	44 上ノ井手遺跡
2 伝飛鳥板蓋宮跡	16 久米寺跡	30 川原寺跡	45 石神遺跡・水落遺跡
3 エビノコ郭遺跡	17 本業師寺跡	31 橋寺跡	46 平田キタガワ遺跡
4 島之庄遺跡	18 紀寺跡	32 定林寺跡	47 ウラン坊廃寺跡
5 飛鳥稲淵宮殿跡	19 木之本廃寺跡	33 松隈寺跡	48 談山神社
6 小墾田宮推定地遺跡	20 興善寺跡	34 呉原寺跡	49 松前上山遺跡
7 廐坂宮推定地	21 日向寺跡	35 海石榴市衢推定地	50 軽市衢推定地
8 飛鳥寺跡	22 大官大寺跡	36 横大路	51 飛鳥川
9 山田寺跡	23 奥山久米寺跡	37 耳成山	52 高取川
10 安倍寺跡	24 豊浦寺跡	38 上之宮遺跡	53 山田道
11 吉備寺跡	25 和田廢寺跡	39 磐余池築堤跡	
12 膳夫寺跡	26 田中廢寺跡・ 田中宮推定地	40 下ッ道	
13 醍醐廢寺跡	27 軽寺跡	41 天香久山	
14 八木寺跡	28 岡寺跡	42 甘樞丘	
		43 畝傍山	

て城とし、武器もおいたという。甘樞丘は飛鳥を一望する中心地の要所にあるが、畝傍山の東もまた京にとって軍事や交通上などの要地だったのであろう。壬申の乱では、飛鳥寺西槻下の軍営や小墾田の兵庫がみえる。松前の地の南を画するように東方山地から連る丘陵の要所に防備施設とみられる松前上山遺跡<sup>(13)</sup>があることも、発達した丘陵や三山付近などが防備的に活用された可能性を暗示するのであろう。飛鳥の小平地を中心に西方の平地、南や北にのびる谷あいや交通上の要地などを含めた周辺地域が、宮が営まれたり寺や邸宅が集中し、そしてその付近の軍事的要地や公私にわたる饗宴の場や路や市といったものの関連をみていくと、飛鳥に広がった京が後の条坊式京に匹敵する規模を早くから有したことも推定できる。

倭京の記述は、隋書東夷伝倭国条とそれに対応する日本側の史書にもみられる。倭国の都は邪麻堆にあり、その都には城郭がなかったことが特記されている。中国の隋の使である裴世清は、導かれて大和に入り、海石榴市に迎えられた。額田部連比羅夫が飾馬を連ねて郊勞したというから、都のはずれの要地がこの市であったともいえる。そこから恐らく山田道を通り、小治田宮に向かったことになる。隋書では倭国に武器はあるが征戦がないことにも注目している。半島の諸国では都の城郭や烽候や城邑、征戦にも注目して記している、中国人のみた倭国の特色は一応客観的だと思われる。竹斯以下の国々から都までの間にも目立った防備施設がなかったであろう。つまり都に城郭がなく、各地に山城等もまだ営まれていなかったと考えられる<sup>(14)</sup>。6世紀代までは各地に防備された豪族居館跡が検出されることから、首長層が武装し、各自が武力を備えていたことは明らかであるが<sup>(15)</sup>、国家としての防備施設はまだ発達していなかった段階だったのであろう。

京の状況が変わるのは斉明朝のことである。難波から大和に戻った天皇は、小墾田に宮を建てようとして果たさず、板蓋宮から川原宮に移り、そして後飛鳥岡本宮を営む。同時に飛鳥の東にそびえる田身嶺に築垣をめぐらし、またそこに両槻宮を作った。宮の東の山にも石を運ん

で垣としたという。狂心渠と一連の工事であった。功夫は合わせて10万に及んだという。これらは遺構として発見されていないものの、飛鳥の中核部の東方山丘に土築の山城と石積の城を作ったことを示すとみられる。標高 600 メートル内外の嶺上やその西麓に防備拠点を営んだこと<sup>(16)</sup>になるわけで、この工事が飛鳥に戻って早急に(656年)実施されたことも注目される。既に記した甘樞丘や敏傍山の近くの施設、あるいは漏刻の設置などによる中心地施設の充実と合わせて、山城を背後に防備化を強めた都の全体配置や都市改造が伺われる。これら斉明朝の都の全体構造の実態が解明される必要があるであろう。

飛鳥の地における方格地割については、寺院や宮殿に多くみられる南北の方位や、遺存する道路と地割からこれまでも岸俊男氏などにより検討され、条坊式の地割に先行する方格地割の存在が主張された<sup>(17)</sup>。しかし統一的な地割の存在はまだ立証されていない。それでも宮殿や寺院の多くが南北方位をとることも事実であり、壬申の乱にみられた街区や当然必要な道路網を含めて京内の地割計画などの体系が今後とも検討されていく必要があるだろう。

倭京の歴史的展開や各時期の状況はまだ不明の点が多く、反面では意外な遺構の発見も続いている。後で問題となるように、飛鳥の中心地よりも北西方の平野部には、天武朝以降に条坊式の街区工事とそれによる京が形成されていくのであるが、それ以前の倭の京はこの地域の地中<sup>(18)</sup>にまだねむっていることとなろう。京の形成にあたって隋使の来訪などの国際的契機が、飛鳥に宮が営まれ続けることを引き出した可能性もあろう。

倭京に至る以前の宮を中心とした宮<sup>みや</sup>廼<sup>の</sup>の状況はさらに判っていない。前田晴人氏は5世紀末から6世紀末ころまでの宮が大和の磐余を中心<sup>ちゅう</sup>に分布し、その範囲が四つの<sup>ちゅう</sup>衢<sup>た</sup>で画されるとみて、そのころから四至京制というべき日本の京の原形が形成されたと立論している<sup>(19)</sup>。宮とその周辺の調査はまだ進んでいないが、各地方の豪族居館の解明は進んできており、飛鳥へ宮が集中する以前の権力機関とその周辺の集住状況などが解明されることを期待している<sup>(20)</sup>。

### 3. 大宰府の復元——羅城と山城のある都城の追求——

畿内では、倭京で斉明朝に山城などの施設が設けられた可能性を考えたが、その実態もまた山城と関連する羅城などの有無も不明のままである。隋書にみえる高句麗では、平壤城に都し、他に二城が都会の所であって合わせて三京としたとみえる。朝鮮半島の山城や都城の研究も急速に進んできて<sup>(21)</sup>いる。遺跡として報ぜられている三国の都に共通する特色は、その都城の一部または近傍、近くの地域的要所に山城が営まれ、都がそれらと関連性を強くもっていることである。加えて羅城が確認されているものもあり<sup>(22)</sup>(図2)、また方格地割を伴う都城もみられる。このような山城及び羅城を発達させた都城がどのようにして形成されてきたか注目したい所である。倭国が半島に出兵して敗れた663年以降、西日本の各地に国をあげて防備施設が営まれ

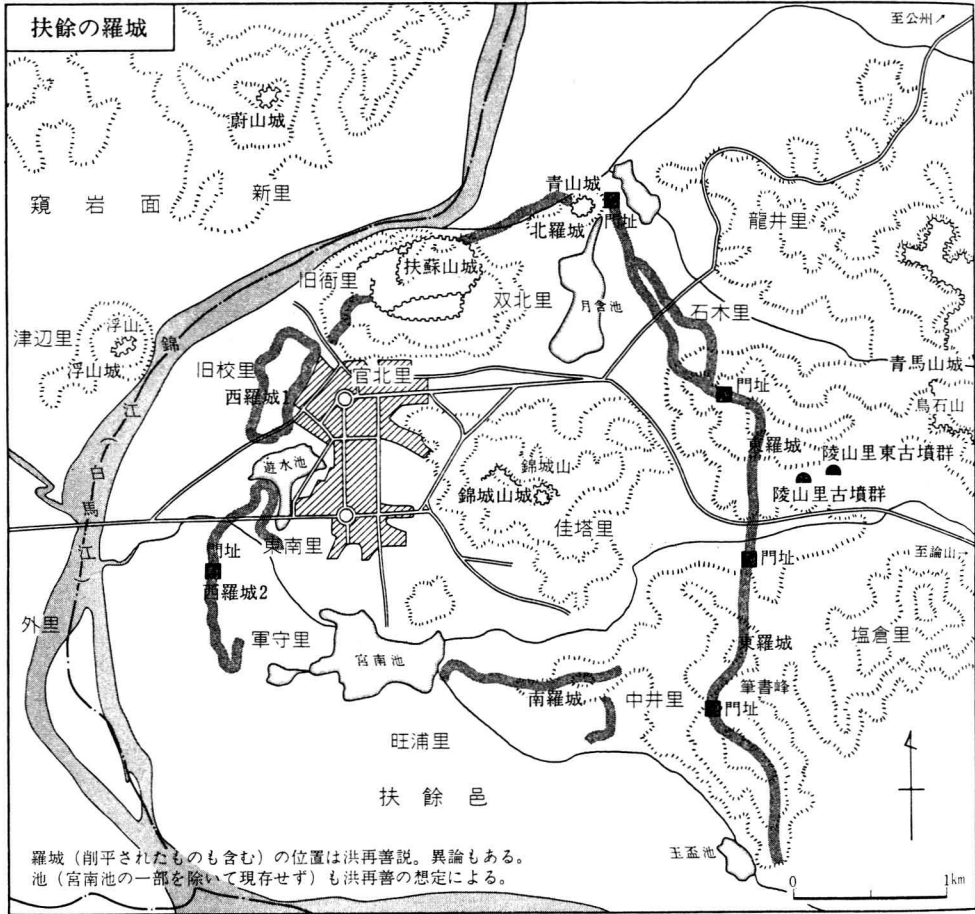


図2 百済国泗泚の都城の羅城  
（東潮・田中俊明「韓国の古代遺跡」による）

た。そこには亡命百済人などの知識や技術が生かされたことが知られている。<sup>(23)</sup> 倭国と半島の諸国との関わりを知る上でも、この時期の倭国の山城や羅城の有無あるいは実態が解明されなくてはならない。その点でまず検討されるべきなのが大宰府である。大宰府に先行すると思われる神籠石式山城や官家などの遺跡も知られているが、それらが都城などに関わる体系的なものか否か、まだ論じる程の成果はみられていない。<sup>(24)</sup> この大宰府について、考古学研究者の多くは都城や西都と呼んで実態的な研究を進めてきたが、文献史学研究者からは京あるいは都城とみることへの留保的研究成果が出されている。果して大宰府は名のとおりの地方官衙と把えるべきなのか、都城の一形態として把握できるのか、大きな論点も残っており、また鏡山猛氏以来の研究成果や発掘成果も重ねられている。早くから半島の都城との関連性も問題としてとりあげられてきた。<sup>(25)</sup> その成果をみておきたい。

(1) 大宰府の輪郭

大宰府は国の「おほみこともちのつかさ」として、国の外交の窓口の役割にもなった九州の統治機関として、536年設置の那津官家以来の歴史をひいて成立してきたとみられている。609年に初めて筑紫大宰がみえる。百濟僧が肥後葦北津に來泊したことを奏しているが、田村圓澄氏は608年の隋使裴世清の來訪がその成立の大きな契機となったとみている。齊明7年(661)に天皇が征西して那大津に至り、磐瀬行宮に入り、やがて筑後平野の奥に朝倉橋広庭宮が営まれるが、半島での敗戦後は大宰の府は海岸より大きく後退し、新しい防備体制が早急に創出された。それらの要点を年次的にあげる。664年に対馬嶋・壱岐嶋・筑紫国等に防人と烽を置き、筑紫に水城を築く。665年に憶禮福留・四比福夫をして筑紫に大野城と椽城を築かせる。この年には唐使が筑紫に至っている。667年には百濟鎮將の使が筑紫都督府に至ったことが日本書紀に記されている。670年にはまた筑紫に城二を築く。これは665年の記事の重複かとされるが、高安城を修める記事に続いており、別の城をさす可能性もある。671年に觀世音寺が發願され、672年の壬申の乱には筑紫大宰は兵を動かさなかった。689年には大野・基肄・鞠智3城を修治し、699年に三野・稻積の2城を修治している。721年に大宰府城門に災があった。これらの記事の背後には全体構想に基づき計画され、造営された大宰府の実態があったであろう。この実態については九州歴史資料館や大宰府市教育委員会等により、政庁、条坊、府域、大野城、水城、基肄城等の遺構が着々と調査されて成果もつみあげられてきた。<sup>(29)</sup>既に大宰府の復元は一定の大枠をもつ見解に達していると思われる。ひとつの見解の原形は大宰府を都城とみる見方である。鏡山猛氏は「大宰府都城の研究」を1968年に公した。<sup>(30)</sup>政庁、郭の条坊、条里、水城、小水城、山城などを詳論し、これを大津京の条坊割りや扶余の羅城や山城と対比し、大宰府が一大羅城(但し水城と小水城をさす。基山築堤は北を正面とする別のものとみる)を構えたと捉え、大野城と基肄城を南北においた都城の一形態であることを立論したのである(図3)。これに対して岸俊男氏は「大宰府と都城制」を1983年に論じ、畿内の藤原京などの研究を基に検討した。<sup>(31)</sup>畿内での京制は地方での国制と対応しながら確立することをのべ、京としての制度的な存在を天武朝の難波宮に求めた。大宰府の構造は百濟の首都、とくに泗泚に極めてよくにているが、大宰府の条坊呼称をもつ郭は水田の条里区画と同じ原理で都城例とは異なるものとし、その成立も平安時代か遡っても奈良時代とみた。大宰府を囲む羅城の内には基山築堤を含めている。こうみると大宰府は百濟などの都城にならうが、畿内の京と並べることはできなくなる。郭の1町割の地割もその中央部にはみられないことも明らかにしている。

鏡山説、岸説をふまえて羅城、郭、条里をみていこう。延長1キロ、高さ約14メートル、基底幅約37メートルの水城は前面に堀をもち、小水城も類似した構造がみられた。水城、小水城は平野と谷をふさぐ施設で羅城とみなされ、基山築堤もその一部であることは小田富士雄氏も





図3 大宰府周辺の地形と遺跡  
 (鏡山猛「大宰府都城の研究」付図1による)

総括する所である<sup>(32)</sup>。水城の西4キロ付近まで小水城が断続し、その西端で南におれていることは石松好雄氏が図に明示した<sup>(33)</sup>(図4)。同じ対象を藤井功、亀井明德両氏は、泗沘の羅城と比較して大宰府には羅城がなく、外郭城が少し離れてあるという。大野城から宝満山、高尾山、宝満川が羅城となり、西方では牛頸山から基山に続く山丘が自然の要害となっていて、この羅城の空白部分に水城、小水城を築堤したとみている<sup>(34)</sup>。以上を通じて、築堤がとりつく丘陵部で

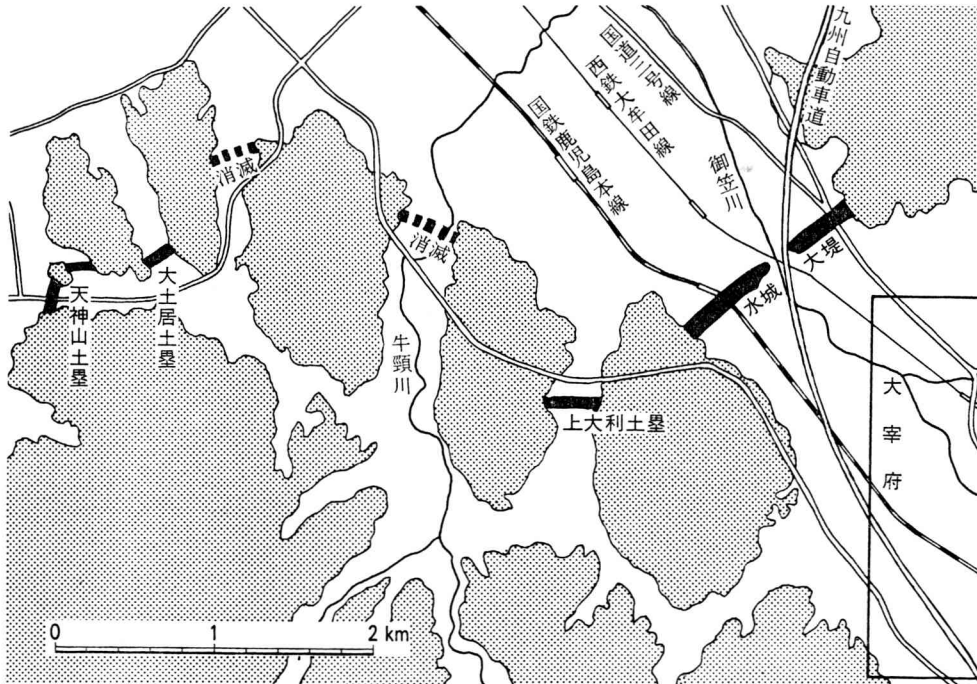


図4 水城と小水城  
(石松好雄「大宰府と多賀城」挿図による)

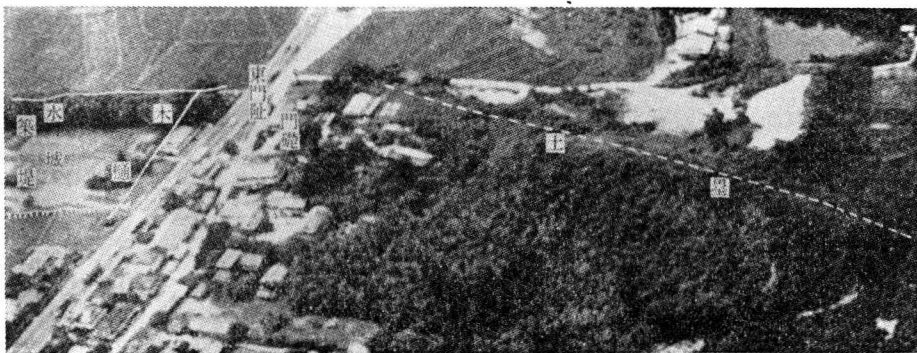


図5 水城東端部と連続する土塁（内側より）航空写真  
(鏡山猛「大宰府都城の研究」による)

は築堤に連続する遺構が認められておらず、水城や小水城は外面に水濠も伴う大土築構造物であることがのべられてきた。鏡山氏は水城の東端部が大野城から降る発達した丘陵に接続し、その丘陵尾根部が水城と連続土塁としてみられることを図示したが(図5)、その後積極的に評価されていない。次に小水城は西の天神山丘陵まで達して、この丘の南にも狭い壇状の高まりが南北にのびて平地をふさぐことが認められているが、ここで土塁が南に折れる理由を説明した論述はみられない。大宰府の東側の筑後平野方面では早くから基山築堤が知られ、その断面

形から鏡山氏は北を外面とする大宰府と別の肥前方面を防備する施設としたが、前述のように大宰府羅城の一部とみる研究者もいる。この築堤の立地や基肆城との関係あるいは東側に他の羅城らしい遺構がみられないことについての論及はみられない。文字通り羅城なら防備ラインが一連として復元されなくてはならないが、自然地形（山丘や河川）がそれに当たるとみる説、宝満川の西の丘陵と宮地岳の間に2キロほどの失われた水城を想定する説もあるものの、遺構としては立証されていない<sup>(35)</sup>。西側の羅城では欠けた築堤も想定復元されているが、東側ではそれも想定されてこなかった（図6）。

次にこの地域の条里について簡略にみていきたい。大宰府付近の条里は、鏡山氏が一般的検討を加え、水城以北の条里は斜行して水城と方向を合わせて施行されたことを図示した。また氏が復元した22条24坊の南北方位の郭と方位を合わせた南北の条里が、連続的に南方に広がり、宝満川の西の丘陵付近まで続いていて、その以東の御笠郡内から朝倉地方には斜行する別の条里が卓越することを示している（図7）。この南北方位条里地や郭内には「八ノ江」、「一ノ上」の地名があり、それが各々鏡山説の左郭36条14坊、右郭17条6坊に当る位置であることを明らかにした。筑紫野町（筑紫野市市）の大字俗明院の「八ノ江」まで郭が及んだことは疑問とし、

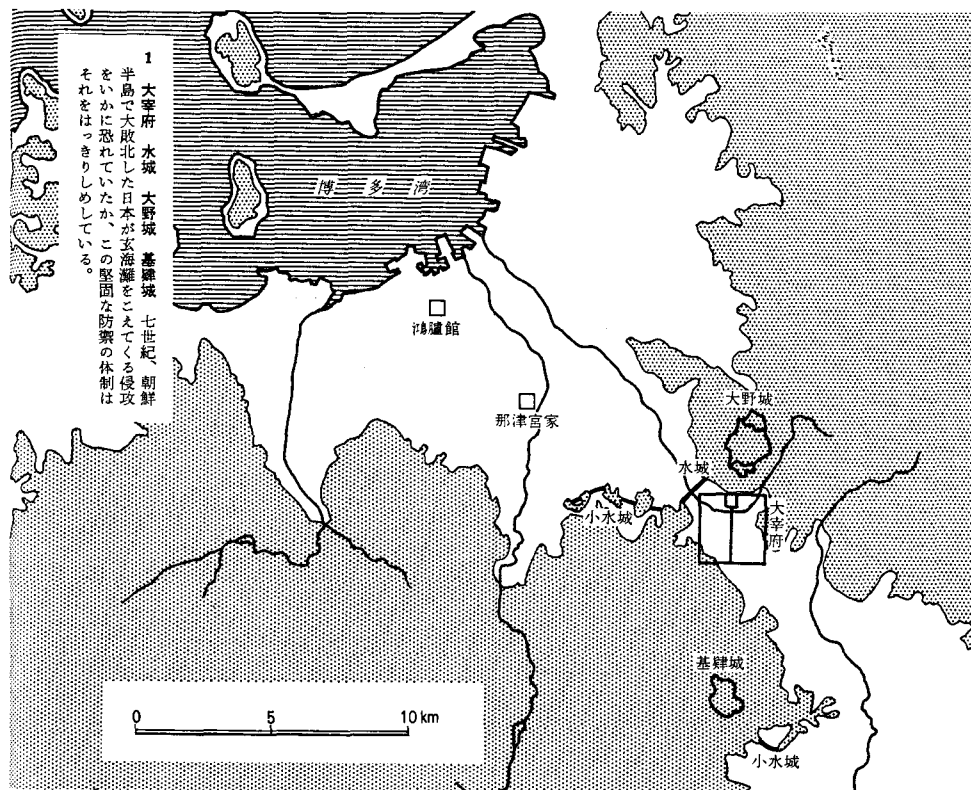


図6 大宰府全体像把握の現況  
(石松好雄「大宰府と多賀城」挿図による)

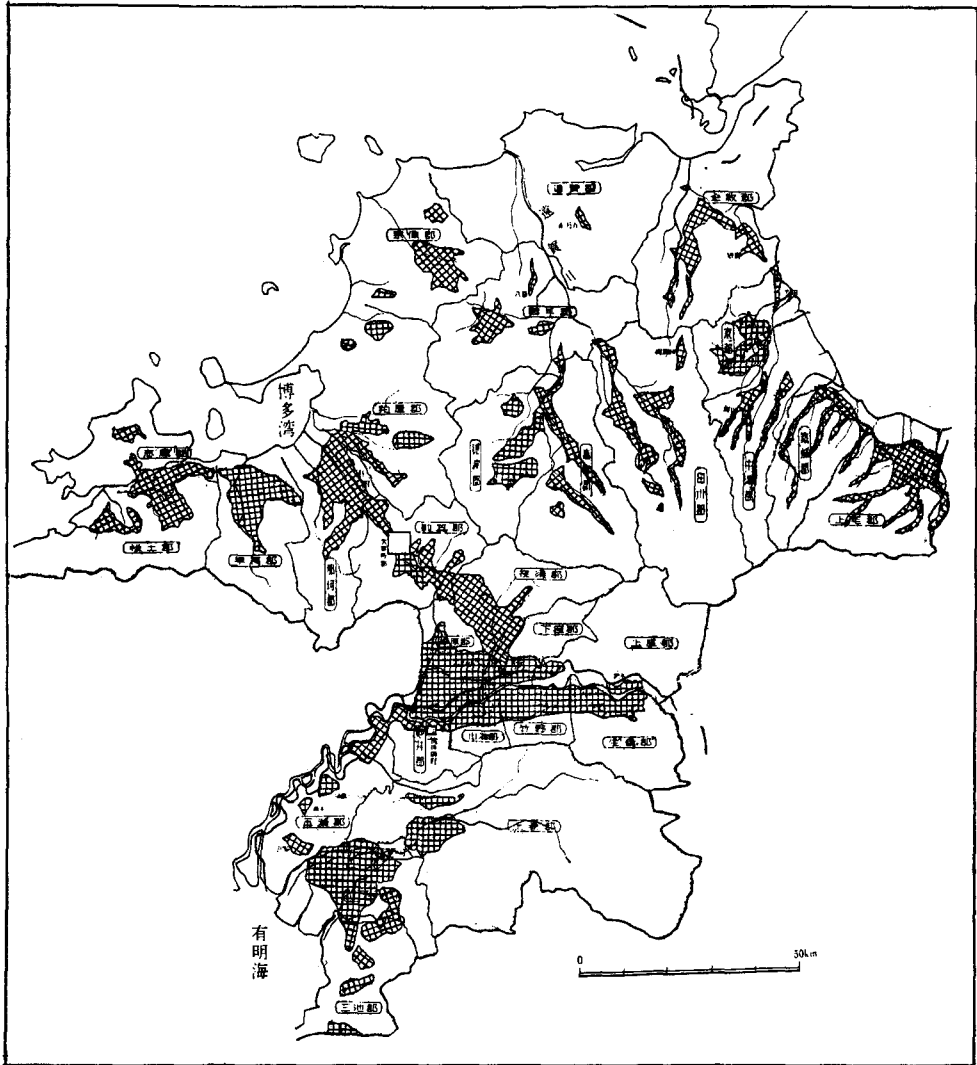


図7 福岡県条里分布図  
(鏡山猛「大宰府都城の研究」による)

統命院は類聚三代格に大宰大式小野岑守が設けたものとして見え、これが大宰府の南郭にあると記されたことに注目している。氏はこれを郭南の条里とみている。延喜5年の観世音寺資財帳の記載では御笠郡の寺田が南〇〇里〇〇坪と記されていることからこれも郭の南の条里をさすとみた。氏は郭を一応22条24坊に設定したので、郭の北方に方格地割が少し残ることになり、郭北条里も想定した。これら条里は奈良期まで降らない施工と考えたのである。この大宰府近傍を含めた条里研究が日野尚志氏<sup>(37)</sup>によって続けられている。「古代における大宰府周辺の官道について」において、大宰府から豊前に至るルートは古く蘆城駅を通り、米の山峠をこすこと、豊後に至るルートの初めが長丘駅で、今の永岡の地に当ること、筑後や肥前に通じるルートは城の山道へて基肄駅に通じるという。基山口には土塁があるが、これは基肄郡を含んで広く

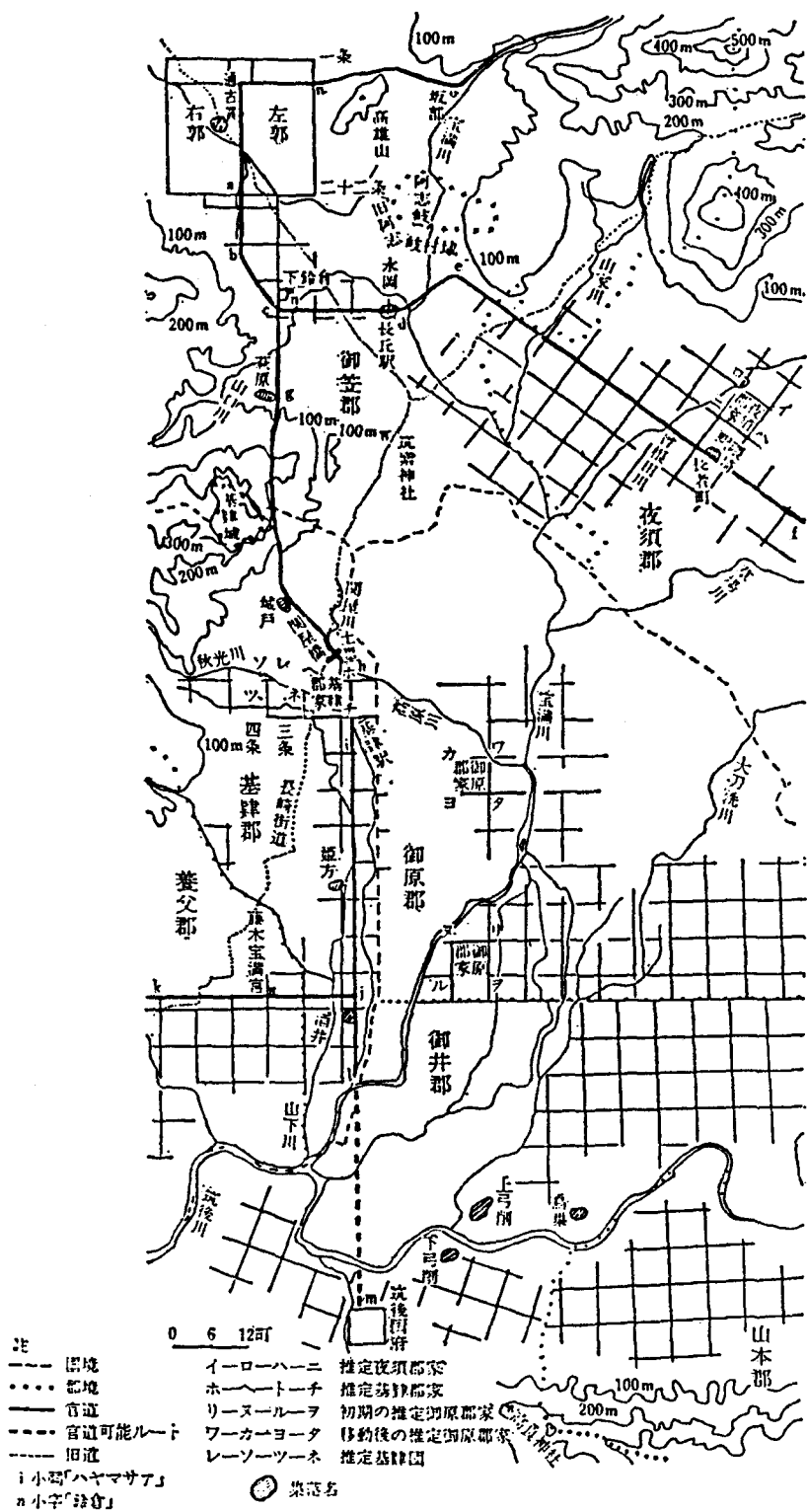


図8 大宰府から南・東・南東への官道  
(日野尚志「古代における大宰府周辺の官道について」による)

肥前国を守るもので、関屋橋があり、土塁と関連して関があったとみる。氏は鏡山氏のあげた「八ノ上」は、22条をもって郭の南限とする鏡山説では坪付位置にのらないことから22条の南2町に里界線を求めた<sup>(38)</sup>(図8)。「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」では、御笠郡の条里について、水城以北は水城の方向と合ったN37°Wの方位の福岡条里区に含まれること、大宰府郭の南ではN1°Wの大宰府条里区が郭と一連の区画をなし、政庁付近などは施行後の消滅が考えられること、条里施行は水城との関係から鏡山説により7世紀後半まで遡るものとする。但し「市ノ江」,「八ノ上」の地名からの坪並の復原は困難と見なすに至った。宝満川の東では阿志岐条里区がN22°Eの方位でみられ、ここも御笠郡内である。また郭の東に高尾条里区と呼ぶ小面積のN32°Eの地割がみられるが坪付呼称はない。大宰府の都城(郭)の南限を鏡山説の22条とした場合、南限の18町南に東西の官道が走り、長丘駅に達することなどの合理性に注目した。なお服部昌之氏は日野氏の前説などにより大宰府近傍の条里の復元図を公にしている<sup>(39)</sup>。以上管見した所で、大宰府条里地区は鏡山氏の復元した郭の南、御笠

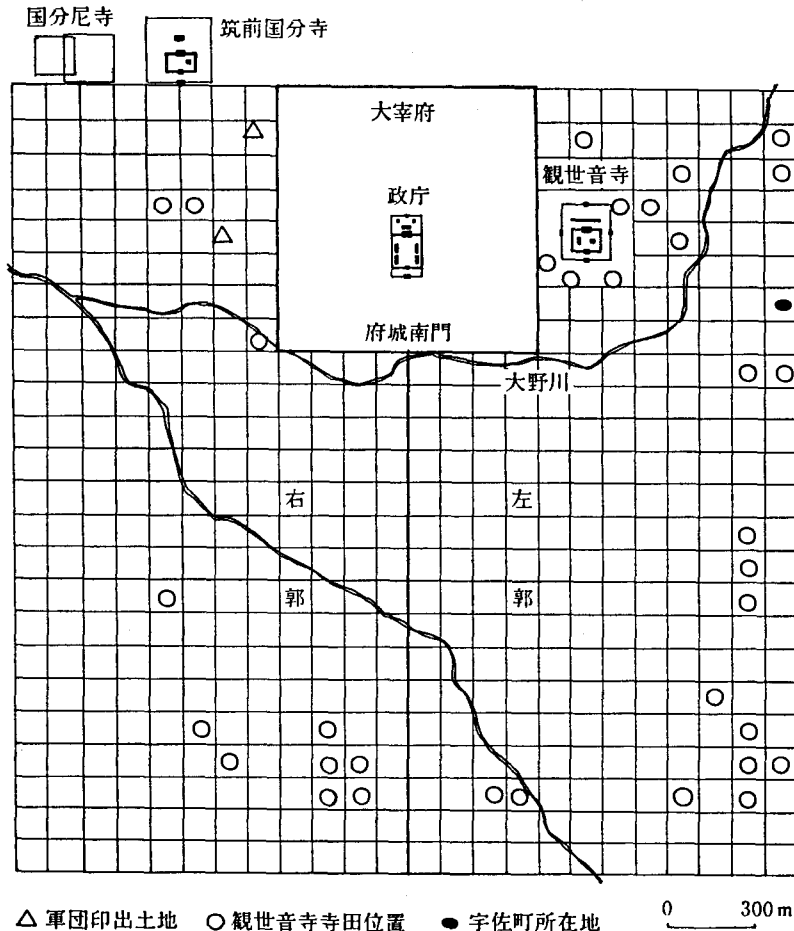


図9 左右郭と寺田等位置図  
(阿部「国庁の類型について」による)

郡内でも限られた範囲にはほぼ正南北方位で施行され、西や東には異方向の条里が広く存在することが明らかである。郭の条坊と条里界線については坪付名称と関連して合理的説明を要する部分がある。官道や地名からこの地区の地割の性格が検討できる可能性もあると考える。

次に鏡山氏が都城と呼ぶ論拠となった郭の部分、すなわち条坊呼称をもつ地区についてみて

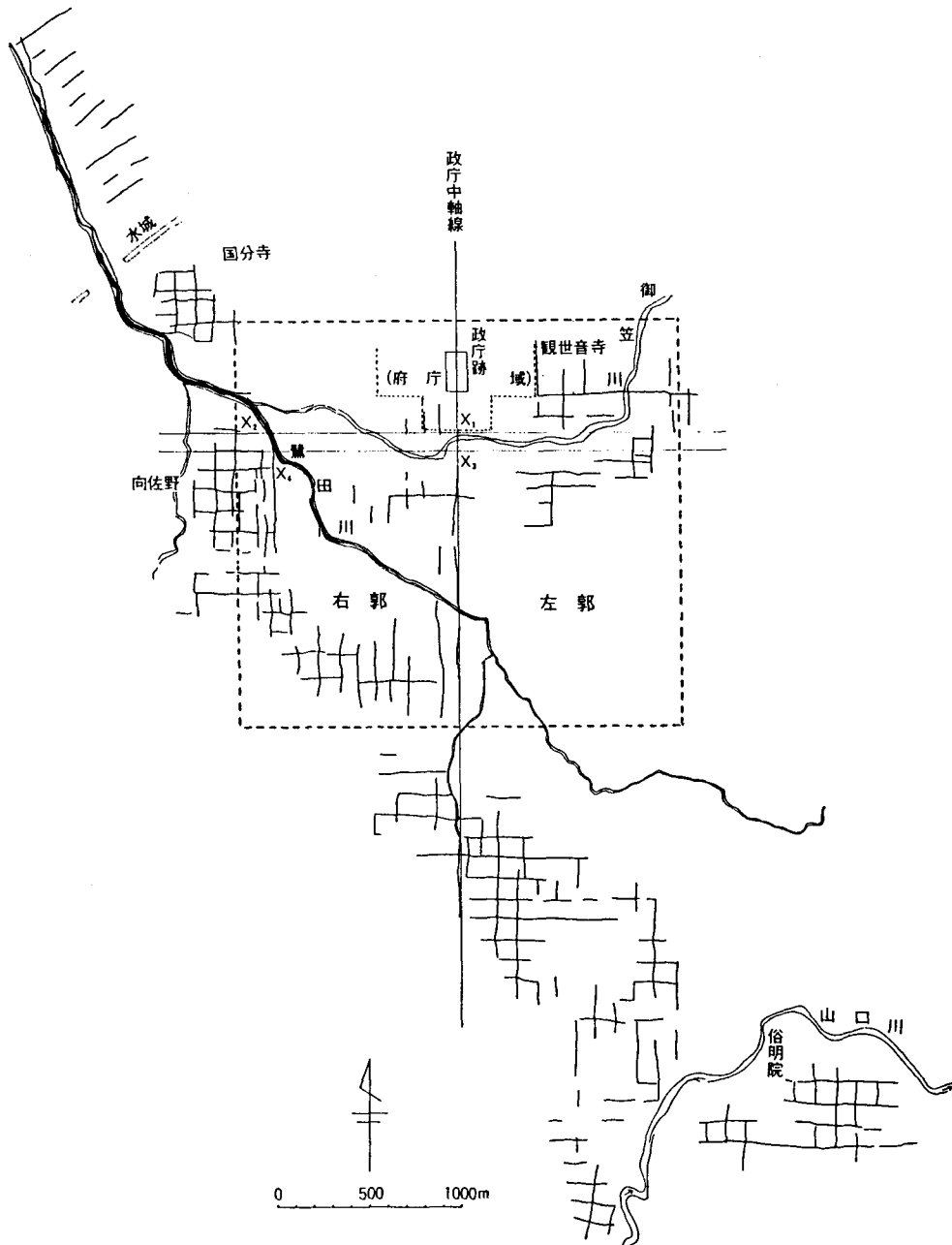


図10 大宰府付近の方格地割分布  
(金田章裕「大宰府条坊プランについて」による)

いく。郭の存在は観世音寺の寺田と関わる文書などから復元されるもので、鏡山氏は南北22条東西24条と復元した。文書にみえる条坊が22条までであることによるもので、条坊復元の定点は観世音寺の寺地付近の条坊呼称地の判定による。寺の前の東西道を4条の踏襲とみなした。条坊呼称は長徳4年(998)以降の文書に認められるもので、条坊は1町ずつに割られ、政庁を北において左右郭に区画されていることから、条坊の工事は天智朝を遡らない奈良以前と考えた。鏡山氏が復元した条坊の内、政庁南方の中心地帯にはそれに合致する地割がみられないことは日野氏、岸氏が指摘する所である。郭の南限を2町南にずらす説もあり、また郭の北限については寺地と郭地との関係から鏡山説より2町北におくべきことを阿部が論じた<sup>(40)</sup>(図9)。合わせて府域を方8町と考え、郭北条里はないとみ、寺田は郭内でもやや周辺の可耕地を開いたものと指摘した。すなわち郭の中心的部分に鏡山説の条坊も寺田もみられないことになる。金田章裕氏は鏡山説に対し、「大宰府条坊プランについて」で再検討を加えた。条坊呼称は天延3年(975)から久安4年(1148)までみられることなど、郭について資料整理し、遺存地割を基に政庁中軸線から一辺約100メートルの方格プランが存在したとみた<sup>(41)</sup>(図10)。条坊施行年代は905年以降975年までに完成したとする。それ以前の835年からみえる郭については、特定の施設の一区画を示すとみる。大宰府の機構の拡充と合わせ、都城を模した条坊プランが形成されたと結論した。問題の焦点となる中心地域の地下遺構については、発掘調査が進行し、成

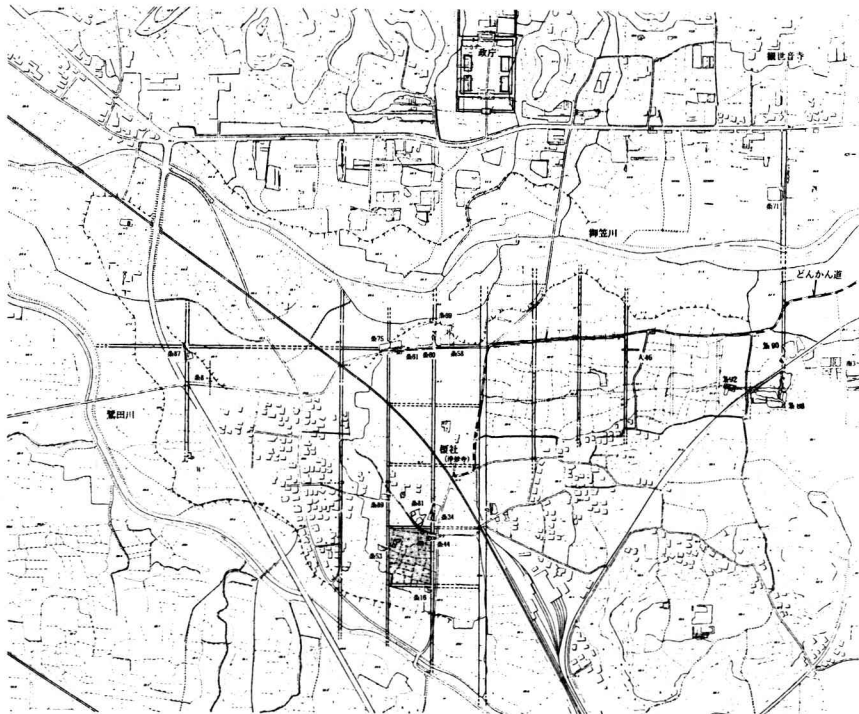


図11A 政庁Ⅱ期の大宰府都市部推定図  
(狭川真一「大宰府条坊の復原」による)



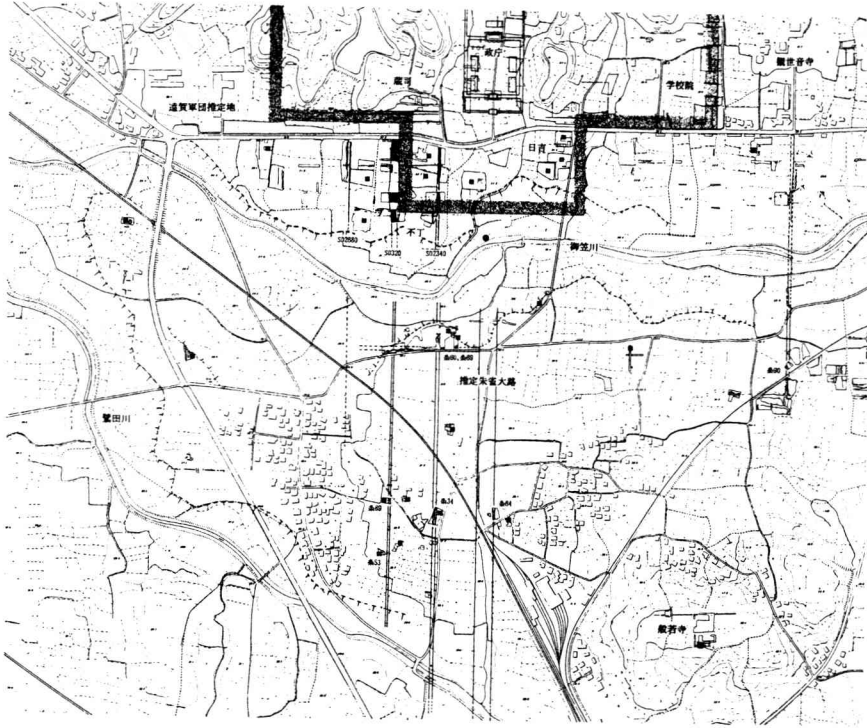


図11B 政庁Ⅲ期の大宰府都市部推定図  
(狭川真一「大宰府条坊の復原」による)

果がようやくまとめられてきた。藤井氏などにより府域周辺の溝などには平安時代前半に遡る遺物がみられないことが1970年代から注意されていたが、狭川真一氏は最近の調査成果をまとめて<sup>(42)</sup>。それによると御笠川と鷺田川にはさまれる郭の中心地区では、南北111×東西84メートルの一区画が復元できた。遺構の埋没は11世紀後半から12世紀前半、造営は10世紀後半頃とみている。さらに8世紀前半代からの条坊は遺存状況が薄い朱雀大路東側溝、右郭の1・2坊路が検出され、道路心の想定によって1坊路まで100メートル余が計測できることを示した<sup>(43)</sup>(図11)。即ち一部の条坊遺構は政庁Ⅱ期(奈良時代)に遡るが、大半の遺構は10世紀後半以降の長方形区画と関連するとみなされている<sup>(44)</sup>。このようにⅢ期以降の遺構が広くみられ、遺存地割とも関係することが判ってきたものの、その範囲は郭全体ではなく、中心地域に限って想定されている。Ⅲ期に都市再開発が計画的になされ、その影響した最大範囲が金田氏によって拾われたように思われる。条坊呼称をもつ寺田は狭川氏のⅢ期の方格の外部にあり、そのような郭の外寄りの地域に条里と合致する地割が広がっていることも指摘できる<sup>(45)</sup>。なお水城西門から斜行した官道が前田遺跡などで調査され、復元されているが、その造営は7世紀後半を上限に8世紀後半を下限とし、水城北方にも連続する官道が検出されていることも注目される。また郭内の墓地の変遷も追求され、都市復元に活用されようとしている<sup>(46)</sup>。

## (2) 大宰府の羅城と内部区画の復元

基山築堤(関屋土塁)は基肆城の東麓にあり、千塔山の丘陵と東方の城ノ上丘陵の間200メートル足らずの所に高さ最大4.8メートル、段の幅15メートルほどで部分的に遺存していたが、土塁としてはこれまで孤立していた。1976~78年にかけて千塔山遺跡が調査され、丘陵の西側にかろうじて遺存していた「とうれぎ土塁」も調査された。<sup>(47)</sup> 残存部で幅6メートル、高さ1メートルほどの高まりであるが、道路でカットされた分を考えると幅15メートル程度の基底部をもつとみられ、版築状の積土がみられた。報告書では、西にある向平原丘陵までの間350メートル、次の丘陵との間にも40メートルほど築堤が想定されている(図12)。土塁の南半をけずって設けられた道路は一直線に向平原の丘陵に達する古い道であり、本来は道に沿った土塁が遺存していたとみられること、関屋土塁が関屋川の流れる平地を閉ざしても、千塔山の西は広く平地が連続して、単独では閉塞施設の意味をなさないことからみて、とうれぎ土塁は関屋土塁と連なって基肆城東麓の平地を閉ざすものであったことが復元される。関屋土塁は北を正面とすると鏡山氏は考えたが、今回のとうれぎ土塁の北側には、北を正面とすることを示す濠は検出されなかった。両土塁はV字状の丘である千塔山を南端に、西側のとうれぎ土塁は西北方へ、関屋土塁は東北方へV字状にのびることと、土塁が達する屋根がのびる方向から南を正面とするものと判断される。向平原からさらに西の丘陵に連なる丘陵線は、基肆城からの連続的稜線へ登っていく。これは水城と大野城との間で鏡山氏が注意した状況と同じである。向平原丘陵の西の低地は、城の山道から城戸の集落をへて直線的に結んだ南北線上に当る。とうれぎ土塁と連続する尾根はやや南に傾いた北西方向、関屋土塁はこれと直角方向をとる傾いた東北方向として、南北方向の城ノ上の丘陵頂部と連なっていく。これらの点から2つの土塁は基肆城と連続して、博多湾に面した水城などと同様の羅城施設として、その東側の一部が遺存していたものとみることができる。

次に博多湾方面に戻って水城と小水城について少し検討したい。小水城は平地6カ所をふさぐと復元されるが、内2カ所は消失している。遺存している小水城も過半を損じている。それらは平地を狭部で閉塞するだけでなく、お互いの間の丘陵が有効な稜線をもつものとして連続するように選定されている。それだけでなく、本来水城がとりつく西の丘陵や東寄りの小水城のとりつく各丘陵で閉塞することも可能であったはずなのに、天神山の東と南の土塁地点までのびている。このため牛頸川の比較的水量の多い河川にも築堤が必要となった。平野部から望むと丘陵末端部を別として、築堤と稜線が連なった形である位置まで羅城が伸びていたことになる。そしてとりこまれた各々の平地が、ほぼ内部で連接できるような地形となっていることも注目される。天神山土塁より西には那珂川の流域の平野が広がる。土塁はここで南におれて丘陵末端にたどりつくが、この丘陵は那珂川水系と牛頸川や御笠川の水系との境をなす発達し

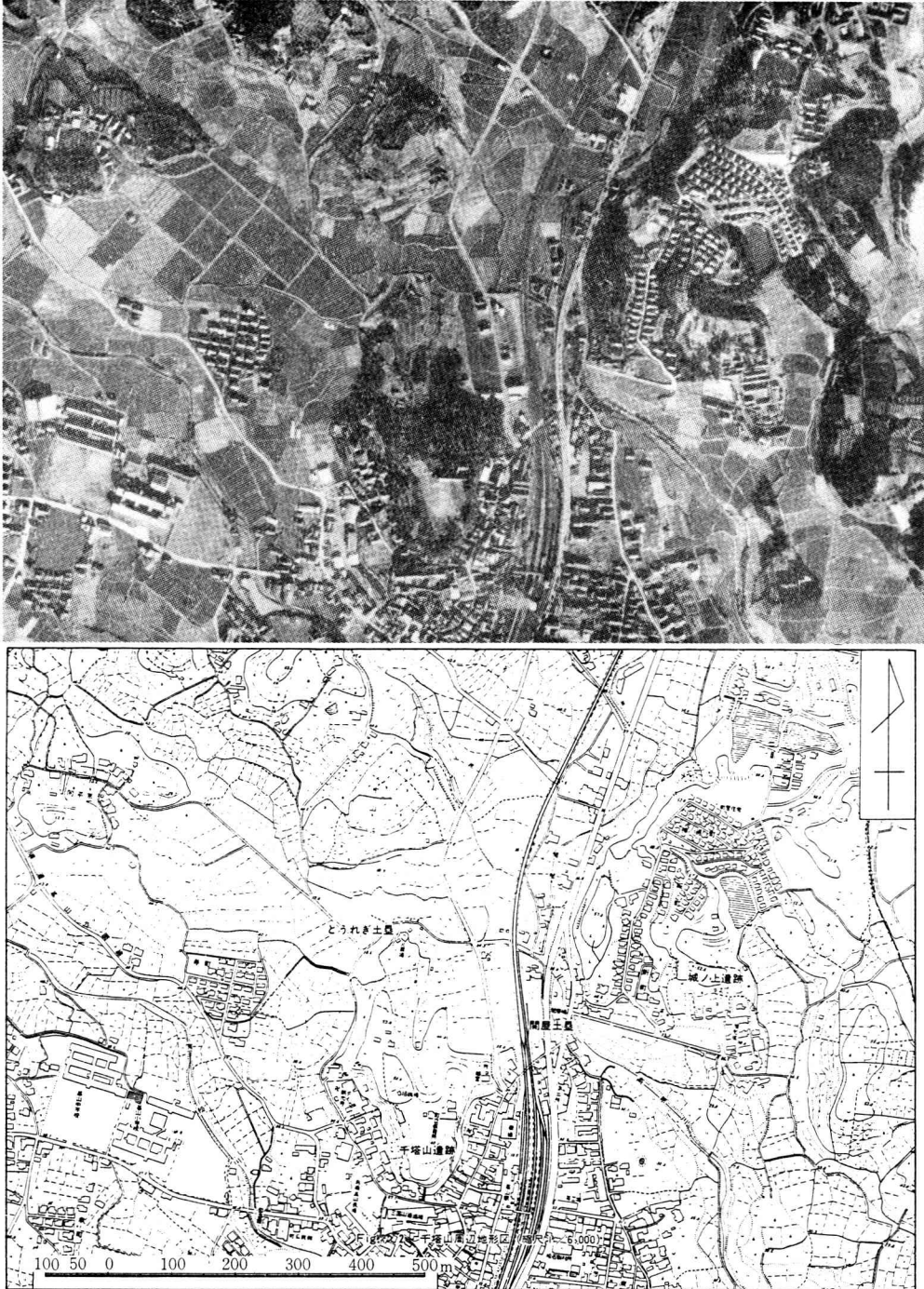
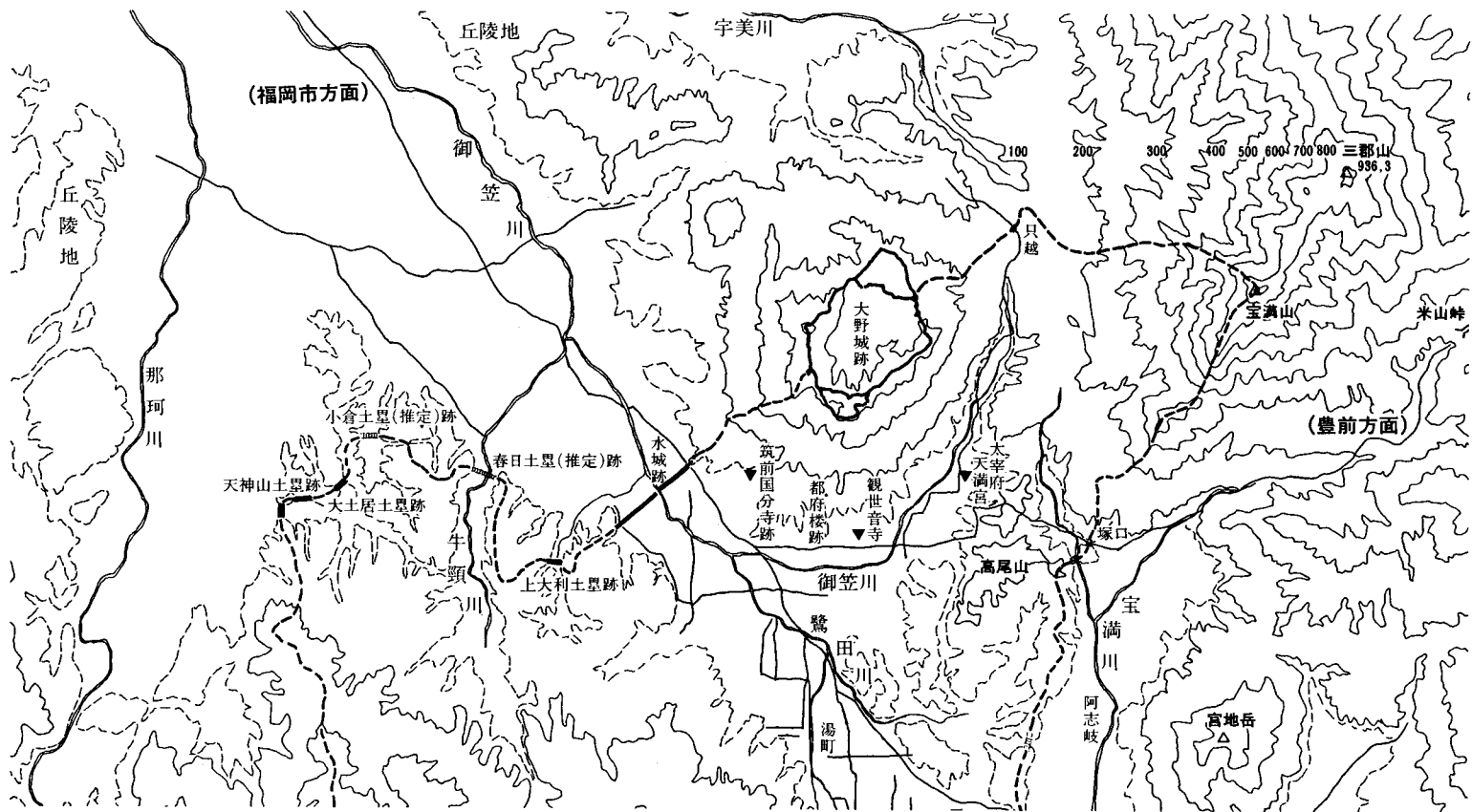


図12 とうれぎ土塁・関屋土塁・千塔山丘陵  
〔千塔山遺跡〕1978による)



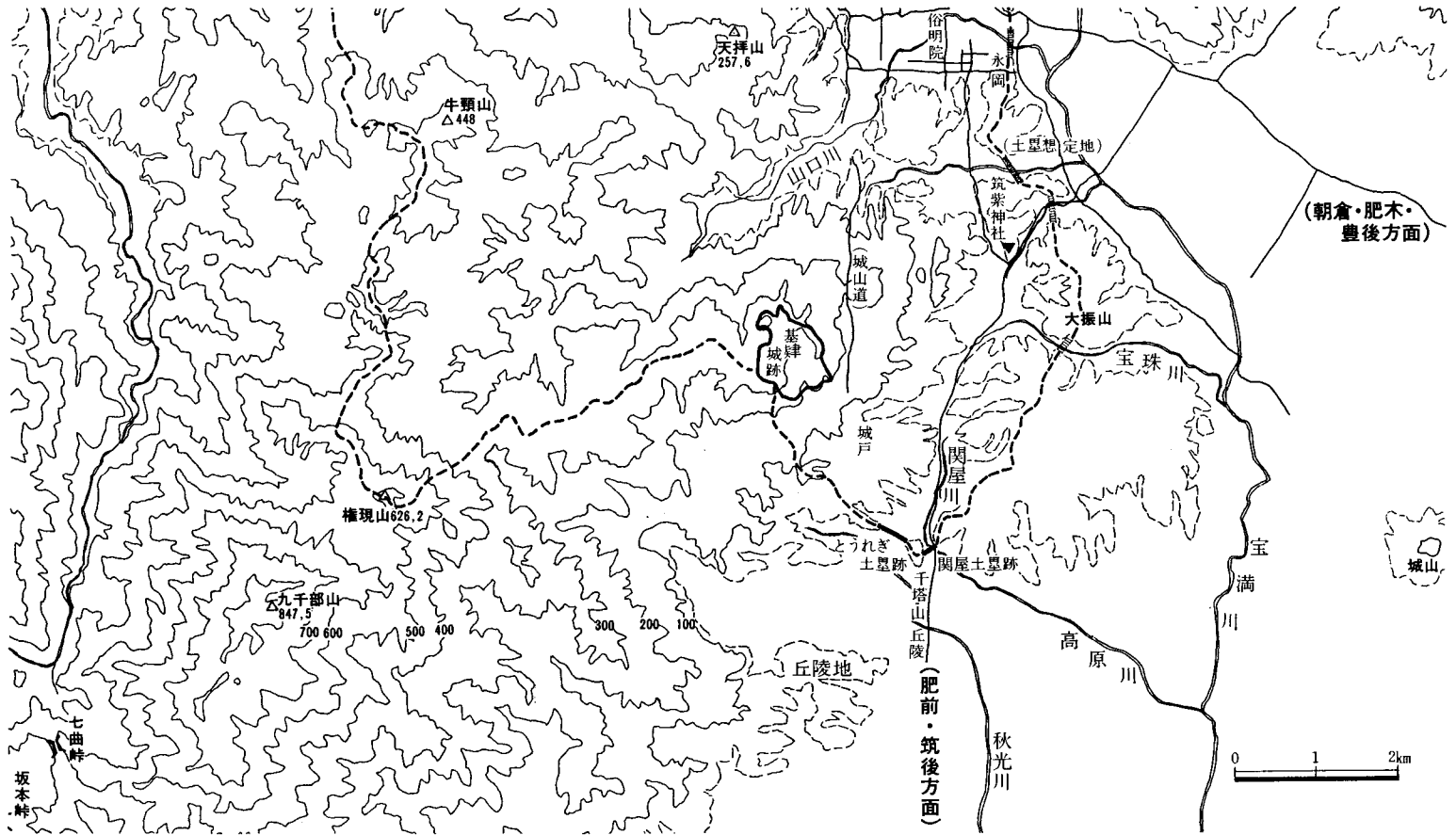


図13 大宰府周辺の地形と羅城の復原

た分水嶺に連っていき、牛頸山付近からさらに権現山(626m)の高所に達し、藤井氏らが認めたとように稜線をたどると基肄城に連なることになる(図13)。こうしてみると、天神山の南の土塁は南北方向の西面羅城の一部を示し、天神山から東の小水城は東西方向の羅城という役割が方向や連続性からみとめられる。なぜ南北土塁は大きな水系の分水嶺にまで結びつくのであろうか。それは自然地形が羅城をなしたとみるよりも、土塁と連なって最も有効に活用できる地形であったとみるべきであろう。分水嶺内外の展望、連絡、防備の利点の他に、そこに既に失われた何らかの人工による加工あるいは施設を考慮しておく必要もあるであろう<sup>(48)</sup>。鏡山氏が掲げた水城東方の丘陵の土塁線も、人工施設は遺らないまでも有効な防禦線として保守されたとみられ、登ると直に大野城に至り、水城口の城門が稜線上に開いていることになる。こうみると、水城と小水城は築堤部を迂回すると楽に越えられるような非合理的、神だのみの的なものでなく、丘陵稜線に結びつけて連続した防備線、警備線となしたと考えなくてはならない。水城の築堤も前面の濠も丘陵線を活用した有効な全体的防備機能と結びついているはずで、新知見のとうれぎ土塁のような防備施設痕跡を今後追求しなくてはならないと考える<sup>(49)</sup>。このように把握された羅城線は北と南の要害地に設けられた大野城と基肄城に連結しているのである。

ではこのような西側に想定された羅城が東側でも復元できるであろうか。分水嶺のとり方からみると、大野城の東側は只越付近から宝満山に至る稜線に求められよう。宝満山から南方では、まず阿志岐の地は府外とみるべきであろう<sup>(50)</sup>。また阿志岐を含む宝満川本流の筑後平野に連なる平野もとりこむことができるとは思われない。西側の小水城のあり方からみると、発達した丘陵群の連結性が有効であれば、小河川も閉塞してとりこんでおり、宝満川の西にはそのような丘陵が南北に連なる形で望んだように存在している。関屋土塁がとりついた丘陵から北に連る丘陵は全くうってつけで、博多湾側の羅城のとり方と同様の方法が適用できる。かくして城ノ上の丘陵から大振山のある丘陵、さらに永岡の地まで連なってこの間で4カ所の小河川を横切る。さらに高尾山から派生して永岡の近くまで続く丘陵が愛岳山をへて宝満山に達する閉塞のラインが想定されることになる。こう見ると、消失した7カ所の小水城と実在する2カ所の土塁があったわけで、必要な土塁の数は東面も西面もほぼ等しいことになる。こうして大宰府の東側にも西側にも、さらに南側と北側にも羅城が復元できる(図13)。しかし東面では関屋土塁をその南端としても、大部分が想定ラインにとどまり、遺存が知られないことも事実である。ではこの羅城線は絵にかいた餅であったのか。私はこの想定された羅城ラインが実在のものであった可能性が指摘できると考える。それはこの想定ラインの内外の条里や条坊の地割である。御笠郡内の限られた地域に施行された正南北方向の地割とその呼称を検討してみることしたい。

大宰府条里区には、鏡山氏が復元した郭と同方向の地割が南にのびている。この地割の遺存範囲は周辺の谷地を別として、御笠郡内でも水城の北方、そして阿志岐の地、そして永岡の丘

陵地の東方を除外した特定の地域にある。水城以北、永岡以東は明瞭に別方向の条里地区である。水城の北方ではその方位は水城の造営と深い関わりがあると考えられている。先の羅城想定ラインの内部にある主要平野部にはこの正南北方向の条里と条坊区画の地域が納まっているのである。また官道も水城西門を通る斜行する古い官道を別として、郭の中軸の朱雀大路が奈良時代には設定されており、条里界線と重なる形で東西に主要道路が永岡までのびてその外では斜方向の条里と合わせた方位に傾いていく(図14)。それだけではない。この正方位の条里地区内に現在の俗明院の集落や地名があるが、ここは承和2年(835)に設けられた続命院の遺名を伝える所とされ、しかもその地は大宰府南郭にあったというのである。本来郭とは城壁に囲まれた地域をさし、二重の場合は内部にあるのを城、外部にあるのを郭と呼ぶのであって、あくまで城壁に囲まれた地域をさすのであり、大宰府の場合の本来の郭とは水城などの羅城施設の連なりが囲む内部をさすはずである。正方位の条里のある地域も郭であり、羅城の内部であったことがこの文字から復元される。東側の羅城ラインは2カ所の土塁しか遺存しないが、この内部には周囲と異なる地割方位がとられ、郭内であったことから、東側にも西側と同様に羅城がめぐっていたと考えることが可能となった。南郭とは、郭の内部を細分して指すもので、より北方に別の呼称の郭(左右郭でも可)があったことも示している。以上のことからここに大宰府の羅城と郭域の存在を復元案として図示した。その結果として、筑後平野側にも山頂から丘陵をつなぎ、築堤もした羅城が連なっていたことになるであろう。とうれぎ土塁はこの羅城の南辺をなし、関屋土塁は東辺の南端の貴重な遺存例として、羅城実存の一証となっているのである。

羅城に囲まれた全体プランは、西南と東北に高い山頂(その背後にもう少し高い展望点もある)をおいて平野をとりこんだほぼ方形の平面をなし、南辺と北辺に大規模な山城を置いたものとなる。広い平地をとりこんでいるだけでなく、南方と西方には羅城線までのびる小平地が連なっており、これは西方は西的那珂川流域から早良・怡土方面へ、南方は基肄郡から肥前・筑後方面への羅城内の安全な交通路と各正面出入口とを確保する重要な要件を示しているものである。そして全体の羅城域の規模は東西8キロ、南北8キロ(一部は10キロに及ぶ)の面積となる。そしてこの内部に式内社の筑紫神社、観世音寺、国分二寺、塔ノ原廃寺なども抱えこんでいたのである。また次田温泉や原田などの地もこの内部にあった。羅城域は御笠郡、那珂郡、基肄郡のそれぞれ一部をとりこんで成立していた。<sup>(51)</sup><sup>(52)</sup>

最後に条坊と条里について若干検討しておく。左右郭の北限は、拙論で鏡山説より2町北に置いた。そして南限を鏡山説と同じくし、左右郭を24条×24坊と復元した。こうした立場から、鏡山氏があげた「一ノ上」、「八ノ江」はどこに位置することになるだろうか。図14に示すように、郭地の南18町には東西に官道が走り、ここから里界線を復元すると「八ノ江」は鏡山説修正後では38条14坊に位置することになり、6町1里で割ると7条(図)某里8坪に位置することにな

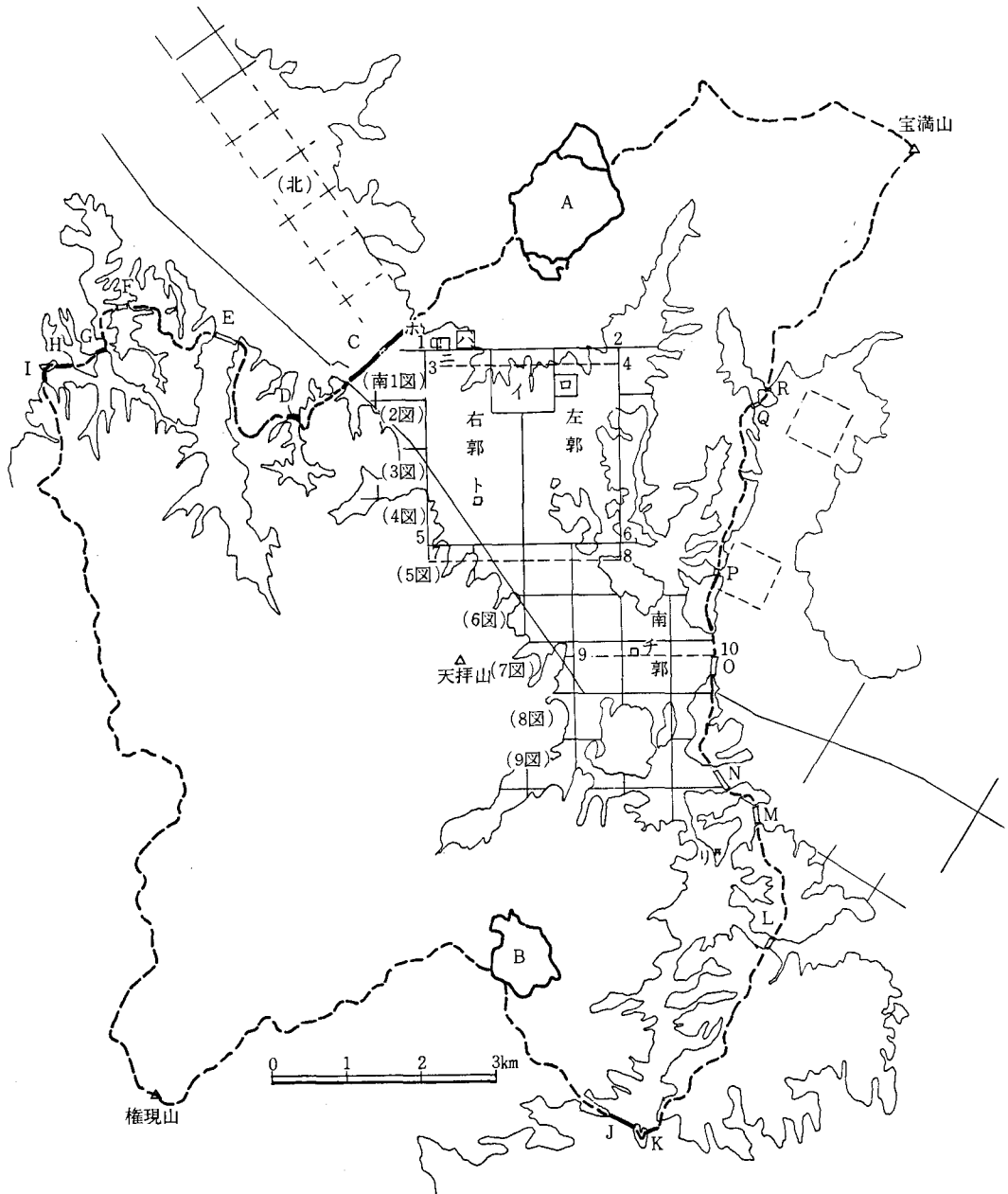


図14 大宰府羅城(郭)内の構成

A 大野城	H 天神山土塁	ハ 筑前国分寺	1~2 府郭北限(阿部説)
B 基肄城	I 天神山土塁	ニ 筑前国分尼寺	3~4 府郭北限(鏡山説)
C 水城	J とうれぎ土塁	ホ 水城東門	5~6 府郭南限 (鏡山・阿部説)
D 上大利土塁	K 関屋土塁	ヘ 水城西門	7~8 府郭南限 (日野1974・沢村説)
E 春日土塁(推)	L~R 土塁想定地	ト 「一ノ上」地名	9~10 日野(1974)説里界線
F 小倉土塁(推)	イ 府庁	チ 「八ノ江」地名	
G 大土居	ロ 観世音寺	リ 筑紫神社	



る。「一ノ上」はどうか。「一ノ上」は19条6坊、すなわち6町1里では4条(図)某里1坪に当る。拙案で示した郭の北限案からは里界と郭の南端と坪付名称が合理的に合致してくることになる。これは一応復元案を裏付けるものとみられる。しかしさらに問題も生ずる。観世音寺資財帳にみえる御笠郡の墾田の条坊呼称が南6図1～2里、南7図1～2里であることは、それらを条里地割の遺存範囲内に置くことができるが、この場合左右郭が条里の4里四方を占めていて、条坊呼称をもつものの、南と呼ぶ条里地区が条坊地区をも包みこむ形でその南方の地区を数えていることになる。このことは「一ノ上」が条里の1坪に当ることと合わせ、左右郭地と南の条里が一連の地割施工であることにとどまらず、左右郭の地区にそれより先行か後行して条里呼称がかぶせられたことを考えさせる。南に対する北は水城北方の条里であろうし、郭北条里もまず想定しなくてよいであろうが、条里と条坊の関係について問題の一視点を加えることになる。

左右郭内の地割では、狭川氏のあげた中心地域の再都市化とみられる所や、金田氏があげた地域を除き、鏡山氏のあげた郭地の外よりの地域には1町割の地割が相当広く遺存しており、右郭の西にも及んでいる。<sup>(53)</sup>このことからすると1町割の区画は古く全体的に施行され、再開発された所には異なる地割が形成され、平安期における古い地割のままの外寄りの小規模墾田地が文書に残ったのではなかろうか。それにしても条坊呼称はどの時点まで遡りうるのであろうか。延喜5年(905)よりも遡って施行されていたとみられる条坊呼称が郭と一体の数を数える点から、この地割は少なくとも奈良時代に遡る可能性が高く、このことは正方位地割が朱雀大路設定と一連のものであろう点からも裏付けられる。その条坊呼称も郭の設定とその細分として把握されるとみられる点から、南郭の呼び名がみえる835年までには成立していたとみるべきであろう。郭の大別も朱雀大路やそれからの区画割を前提とする点からは、条坊呼称のある左右郭をとくに下降させる必要が認めがたい。再開発された中心地区はそれをさす別の呼称を有したはずであり、古い地割をひく寺田はその範囲外にあって、10世紀以降に再開発された都市部とは一連の呼称をもつ必要がないと考えられるのである。

以上あげたように、大宰府では羅城の造営に続いて郭内の方格地割が正南北方位でなされ、北の左右郭と南郭に細分され、南は条里呼称で呼ばれた。狭川氏がとりあげた墓地の状況から<sup>(55)</sup>も北部は都市化予定部分として本来設定されたものであろうと考える。持統3年(689)の新城は、あるいはかかる都市区画などの完成検査を示すのでなかろうか。<sup>(56)</sup>なお羅城の形成年代については、筑後と肥前で羅城と類似した築堤が知られ(図15)、しかも天武朝には既に存在したと論ぜられている点も注目される。<sup>(57)</sup>これらの築堤も大宰府羅城郭の存在との深い関わりで存在したことが復元できるが、これについては別に検討を行うこととしたい。

ここで山城と羅城をもち、内部に条坊呼称区と条里区をもつ大宰府が果して都城と評価できるのか、再考してみたい。これは畿内都城の点検後に本格的に論じることができるので、予察

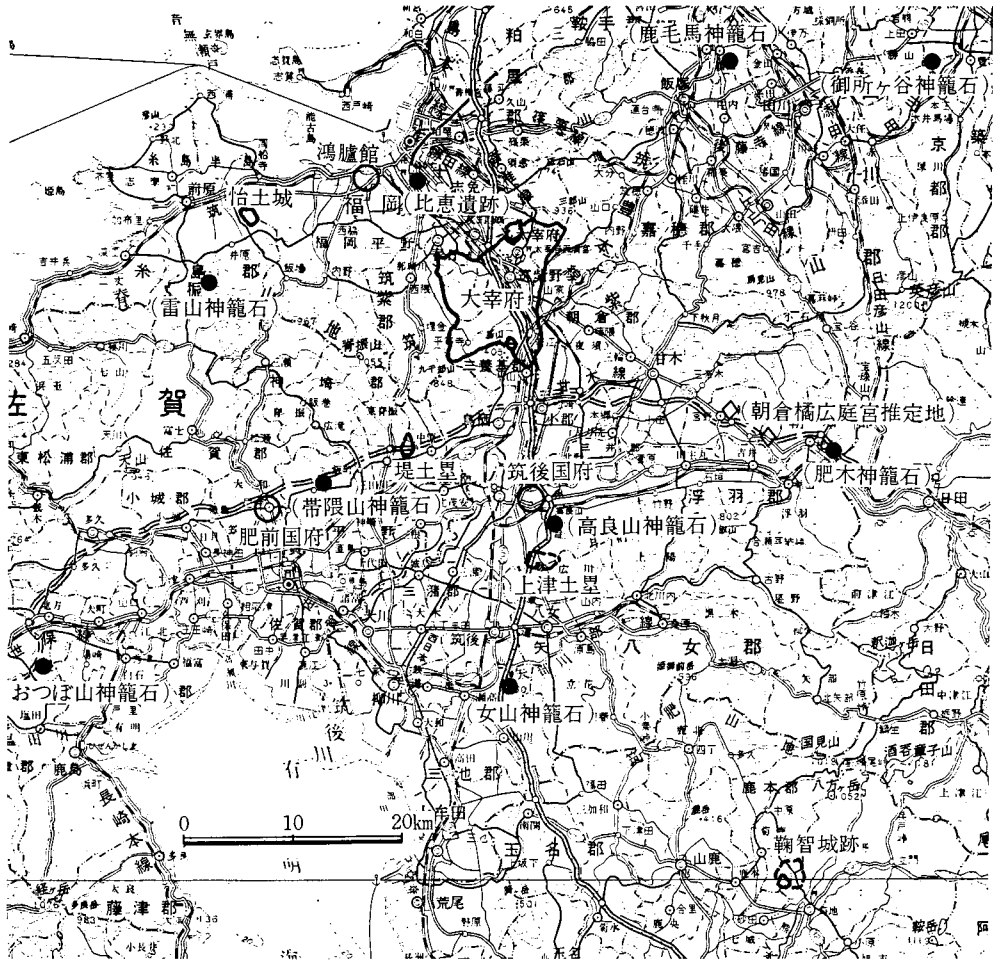


図15 大宰府と関連遺跡  
(堤土壘・上津土壘の範囲は筆者の推定案)

的なことにとどまる。山城に加え羅城をめぐるし、整った方格地割の都市予定部分をもつ大宰府は都城とみなしてよいと思われる。問題はこの条坊地割が畿内の例と異なること、また律令官人がここを京あるいは都城として呼び、意識したかである。権力中樞を遷置する京の予定地にしたことは文献から伺われないが、行宮などの機能も収容し、国家権力の機能の一部を受け持ち、統治地域も分けられた大宰府であるから、隋書高麗伝の三京一都会の所に近い意識はあったであろう。国家権力所在地にならなかった点が京、都の呼称を残さなかった理由にならう。文献史的には大宰府は京には入れがたいとしても、遺跡は都城の一形態を実現していた。それが大陸・半島と向きあった大軍事基地でもある大宰府の姿でもあった。

大宰府の方格地割が1町割りである点は、都城の条坊割りの実態をみると、5町を1里として4分する新益京などの例の他、5町を3分する例、あるいは6町を4分する例すら参考例としてみられ。6町を1里とし、それを6分するやり方も実験例の1例に当る。大宰府の町割り

が特に広い朱雀路付近では均等な方格でない点もこれを都城制の試行として見る視点を加える  
<sup>(58)</sup>  
 であろう。

#### 4. 小論の結び

小論は、日本列島における都城形成を論ずる第一歩として、大宰府の検討から都城を再検討する視点を求めたのであるが、今回は大宰府復元のラフスケッチにとどまるに至った。そこで小論の結びとして大宰府から展望される列島の都城形成について若干の問題を記しておきたい。畿内では新益京以降に本格的な条坊京がいわば主流として変遷を重ねる。条坊を立証できない京はあまり評価されなかった。また条坊式都城ではとくに都城の要件である城郭のあり方について説明されることはなかった。大宰府が本格的な都城として、朝鮮半島の都城を受けて最大規模で羅城と山城を実現していることからすると、同時代の畿内都城がそれと無関係なはずはないであろう。山城や羅城と結びついた都城は大宰府だけでなく、畿内の都城でもさがし出されうるのである。それは7世紀後半にとどまらず、奈良時代にも検討対象が多く存在している。防備を主眼とした都城の構えは大きな原則として認められ、日本の都城あるいは都市として本質的なあり方を示す可能性も高い。条坊式の都城ですらも、条坊による都市の外部に実効的な防備ラインと施設があって初めて安定しえたのである。このような点から、今後大宰府を基点として山城や羅城と結合した都、羅城を平地にめぐらした都、そして条坊式都城の様々な形での実験と変遷の歴史、そしてそれと関わる東アジアの都城及び国家間の交流などについてみていかななくてはならないであろう。大宰府以前に飛鳥の防備は始まっており、神籠石式山城は各地に築かれ、地方豪族の城柵とみまがう居館も築かれていた。それでも大宰府に実現した都城の実態は実に雄大なものであったし、畿内都城の再検討を迫る点が多くあると考える。西海道に置かれた大宰府を上級官衙としてみると、列島の各地にも対比される状況が展開したかという視点も生じうるであろう。また羅城がどう維持され、意識され、失われたかという問題も残っている。今回の検討は大宰府のもつ問題のごく一部に私見を加えたにとどまり、それも先学の成果に導かれる点が大であったことを明記しておきたい。

#### 註

- (1) 岸俊男「古代宮都の研究」岩波書店 1988, 同「古代宮都の探求」塙書房 1984, 藤岡謙二郎「古代都市」講座考古地理学2 学生社 1983, 上田正昭「都城」社会思想社 1976, など。
- (2) 町田章「古代の官殿と寺院」古代史復元8 講談社 1989, 同「古代の都城」季刊考古学22 1988, 坪井清足 古代を考える「宮都発掘」吉川弘文館 1987, 「都市と都城」歴史評論489 1991など。遺跡の整備公開も各都城で進んでいる。
- (3) A倭京, B近江京, C難波京(羅城があるはずの天武朝につながる京(C<sub>1</sub>)と奈良時代の条坊京(C<sub>2</sub>)がほぼ同一地域で調査継続中)。D新城(京であるか, 実態が問題), E新益京(新城と重なる部分がある

- とみられる), F平城京, G恭仁京, H紫香楽京, I北京(保良宮), J西京(由義宮), K長岡京, L平安京, そしてM福原京も視野に加えておこう。継続調査がABCDEFGHIJKLで行われている。条坊が調査され, 広く施行された条坊式京とみられるのは, C<sub>2</sub>, D-E, F, K, Lのはぼ5カ所である。
- (4) 飛鳥関係の史料は, 奈良国立文化財研究所「飛鳥編年史料集稿」1976~79による。倭京についての考察には, 秋山日出雄「飛鳥京」講座考古地理学(2)古代都市 学生社 1983, 浅野充「律令国家と宮都の成立」ヒストリア122 1989など。
  - (5) 飛鳥の宮の発掘状況については, 木下正史「飛鳥の諸宮」古代を考える『宮都発掘』, 及び註(2)文献参照。
  - (6) 明日香村教育委員会「雷丘東方遺跡第3次発掘調査概報」1987。
  - (7) 註(5)文献参照
  - (8) 秋山日出雄「飛鳥京」講座考古地理学(2)古代都市 学生社 1983
  - (9) 飛鳥の評価は, 仁藤敦史「古代国家における都城と行幸」歴史学研究613 1990, 浅野充「律令国家と宮都の成立」ヒストリア122 1989。
  - (10) 倭京の範囲については秋山日出雄氏の横大路以南に8×9里とみる説, 前田晴人氏の輕衢, 海石榴衢, 中市の衢, 祝戸で囲む四至京説, 6×9里とみる押部佳周氏の説(「飛鳥京・新益京」直木孝次郎先生古稀記念会「古代史論集」1988)などがある。
  - (11) 亀田博「飛鳥の苑池」『発掘された古代の苑池』学生社 1990。
  - (12) 清水真一「上之宮遺跡第五次発掘調査概要」(財)桜井市文化協会 1990, 他。
  - (13) 林部均「桧前上山遺跡」大和を掘る 榎原考古学研究所付属博物館 1985他。遺跡が天武朝以降としても, 桧前の地を抱く形の丘陵の要地を占め, 飛鳥の南を占める重要性を示し, その意義は遡って認めてよいであろう。
  - (14) 隋書の倭国伝の無城郭の文字からくみとれることについて, 阿部「古代の城柵跡について」歴博研究報告一 1982でふれた所, 高橋学而「古代山城研究における課題」歴史評論1985-1で読みの誤りと指摘をうけた。無城郭が都についての挿入句に続いた都に関する特記であることはその通りだが, 三国などの記述で都を某城に置くとか城邑や烽戍邏についての記述など, 中国人の視点が明瞭である点からすると, 無城郭・無征戦という倭国の条の特色は全体の流れとして倭国全体の特色に及んでいるとみることができる。高橋氏と同様な批判は, 渡辺正気氏「古代の山城」九州と日本社会の形成 吉川弘文館 1987にもある。
  - (15) 国立歴史民俗博物館「再現・古代の豪族居館」1990。
  - (16) 田身嶺に周垣を冠し, 復た嶺上の両槻樹辺に観を起し, 号して両槻宮となす。また天宮というところがあるが, その周垣は観のため巡らされたとするには功夫の大きさや周垣と宮号の間に復の字がある点からまず嶺上に山城が築かれたとみる。その比定地は談山神社のある多武峰付近が山城占地の共通点を有しており, 寺としての結果も残る。ここかまたは西方嶺上の間に占地したと思われる。盆地・三輪山, 高安山等も望む景勝地である。斉明朝に西日本各地に所謂神籠石式山城が築かれた可能性は渡辺正気氏(「斉明紀四年是歳或本の記事と神籠石」九州考古学60 1986, 「神籠石の築造年代」斉藤忠先生頌寿記念考古学叢考中巻 1988)が指摘している。斉明朝に修補したとみる見方もありうるが, 飛鳥の記事との関連も注目される。多武峰から高取山への後線をたどると, 高取川主流の水系を排除する形で飛鳥や桧前を包みこんで桧前上山遺跡のある丘陵へ, さらに平田キタガワ遺跡にまで達する。多武峰から北方へは小河川を包みこむ形で丘陵や台地端を連ねて香久山北方にまでたどりうるが, いずれも連続的防備施設の痕跡はみられていない。この地区での池の堤跡とみなされる遺構等も, 後述する大宰府や筑後平野や備中での防壘の堤のあり方からみると, 今後の検討を要する。和田萃「磐余地方の歴史的考察」『磐余・池ノ内古墳群』奈良県教育委員会 1973。
  - (17) 岸俊男「飛鳥と方格地割」史林53-4 1970。井上和人「飛鳥京域論の検証」考古学雑誌71-2 1986。
  - (18) 藤原宮下層やいわゆる藤原京の道路を伴う方格地割は天武末年に遡り, 倭京との関係も問題となるが, これについては条坊式京の形成の問題で別に論ずる。
  - (19) 前田晴人「倭京の実態についての一試論」続日本紀研究240・241 1985。
  - (20) 阿部「宮殿と豪族居館」古墳時代の研究2 雄山閣出版 1990 に宮殿例もあげた。

- (21) 東潮・田中俊明「韓国の古代遺跡」新羅篇 中央公論社 1988。同「韓国の古代遺跡」百濟・伽耶篇 1989。巻末に発掘年表並に文献が列挙されている。
- (22) 註(2)参照。伊武炳「山城・王城・泗沘都城」島津義昭誌 古文化談叢24 1991。
- (23) 西日本の古代城郭については、小田富士雄「西日本古代城郭遺跡の研究動向」古文化談叢20(下) 1989。
- (24) 那津官家と関るかと思われる遺跡については、柳沢一夫「福岡市比恵遺跡の官衙的建物群」日本歴史 485 1987。橋広庭宮の比定地については九州歴史資料館「朝倉橋広庭宮跡伝承地」1974, 同1975がある。把木町志波地区に比定する松村一良説(註67)松村論文)もある。
- (25) 1984年末までの大宰府の研究文献は歴博研究報告10 1986に集成した。
- (26) 田村圓澄「大宰府探求」吉川弘文館 1990。巻末に参考文献も付されている。
- (27) 斉明朝の遷宮が、渡辺氏の説く神籠石式山城の年代に近いとすれば、橋広庭宮の立地や造営は山城の計画的配置も伴う周到なものであると解されことになる。宮は単なる海岸から奥地への遷移ではなく、山城連環の中核的機能をもった可能性も生じる。宮の調査進展が望まれる。
- (28) 主に竹内理三「大宰府・大宰府天満宮史料」1964他 による。
- (29) 各年次の発掘報告がある他に、石松好雄「大宰府と多賀城」岩波書店 1985, 田村圓澄「古代を考える 大宰府」吉川弘文館 1987, 狭川真一「筑前国分尼寺を探る」都府楼6 1988, 山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」中近世土器の基礎研究IV 1988, 金田章裕「大宰府条坊プランについて」人文地理41-5 1989, 太宰府市教育委員会「大宰府条坊V」1989, 田村圓澄・註(29)文献, 倉住靖彦「古代の大宰府」吉川弘文館 1985, 同「都市大宰府をめぐる若干の考察」九州歴史資料館研究論集15 1990, 狭川真一「大宰府条坊の復原」条里制研究6 1990, 同「古代都市・大宰府の検討」古文化談叢23 1990, 同「大宰府の都市と道路」日本考古学協会1990年度大会発表資料集1990。
- (30) 鏡山猛「大宰府都城の研究」風間書房 1968。
- (31) 岸俊男「大宰府と都城制」『大宰府古文化論叢上』吉川弘文館 1983。
- (32) 小田富士雄「西日本古代城郭遺跡の研究動向」古文化談叢20(下) 1989。
- (33) 石松好雄・桑原滋郎『大宰府と多賀城』岩波書店 1985の17頁の7図。
- (34) 藤井功・亀井明德「西都大宰府」日本放送出版協会 1977。
- (35) 倉住靖彦「都市大宰府をめぐる若干の考察」九州歴史資料館研究論集15 1990。
- (36) 春日築堤に加えて春日市の小倉水城跡も注意されている。春日市教育委員会「春日市の史跡」1980。
- (37) 日野尚志「古代における大宰府周辺の官道について」歴史地理学紀要16 1974。同「筑後川流域右岸における条里について」佐賀大学教育学部研究論文集23 1975。同「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」佐賀大学教育学部研究論文集27-2 1979, 同「西海道における大路(山陽道)について」九州文化史研究所紀要32 1987。
- (38) 日野説でも「八ノ江」と条里坪付は解決しない。鏡山氏の「八ノ江」は36条14坊に当り、郭南限を24条とすると、条里部分で残り12条14坊となり、里界線の北に接するはずである。なお日野1987では水城西門につながる官道の遺構についてもべている。
- (39) 服部昌之「大宰府周辺の古代景観の復原」『日本歴史地図』原始古代編(下) 柏書房 1982。
- (40) 阿部他「徳丹城とその施釉瓦について」歴博研究報告6 1985, 阿部「国庁の種類について」歴博研究報告10 1986。
- (41) 金田章裕「大宰府条坊プランについて」人文地理41-5 1989。
- (42) 註(29)にあげた狭川「大宰府条坊の復原」「古代都市大宰府の検討」「大宰府の都市と道路」参照。
- (43) Ⅱ期の条坊では朱雀大路の幅は確定していないので、右郭一坊路との心々距離も101.5mより長くなる可能性がある。(毎日新聞1991年5月16日西部版によると朱雀大路は道幅35メートルと判明したという。この場合右郭一坊路は1町割線から内寄りに設けたことになるらしいが、さらに正報告をまちたい)。Ⅲ期の町割りとは異なることは明らかで、鏡山説で予想された1町割と関る可能性はまだ残されている。2坊路とされる遺構は1坊路とも異なり、今後の立証をまちたい。
- (44) Ⅲ期の道路もまだ検討の余地が多くあるようだが、Ⅱ期の遺構が薄いことは両河川間などでの洪水等による流失があるのであろう。

- (45) 岸氏は明治初年の地籍図での遺存地割の復原作業の結果、郭の西や南の周辺地域に条里制遺構が遺存していることも註⑨文献で記した。筆者は東半の低丘陵地にも遺存していると考え。
- (46) 狭川「古代都市・大宰府の検討」註⑨。
- (47) 中牟田賢治「千塔山遺跡」基山町遺跡発掘調査団 1978。
- (48) 山城でも土塁線が自然傾斜と区別できないケース、当然存在したのに流失したとみられるケースが多くある。傾斜変換点を今に残す土塁等は遺存条件があったとみるべきである。大野城の大宰府口城門付近で土塁上に柵列が検出されていることにも留意したい。
- (49) 丘陵地稜線部も開発が急進している。丘陵間も道路や堤となって要検討ケースがある。また羅城想定地も必ずしも1カ所でない地点もあるが、有力なラインを図示した。
- (50) 蘆城駅は早くすたれたとみられるが、官人の遷任に当ってここまで銭に出ていることから、ここは大宰府郭外の最初の駅とみるべきであろう。
- (51) 次田温泉は万葉集時代から知られる。原田は郭内の筑紫神社近くの南部の要地であったことになる。天慶年中筑前守だった大蔵春種の末という原田氏が居ったという。
- (52) 複数の国郡にわたる所に郭城の性格の一端もみられる。郭城中央位置は天拝山に当る。
- (53) 左右郭は、条坊地割と同規格で割っていったとすると4里分を占める。郭の南の条里は5里から始まるとみてよいだろうが、右郭の西の狭い外辺が南条里の1~4里をかるうじて示していたともみられる。
- (54) 条坊呼称は1町ごとであるが、道路は朱雀大略の他、実際上の大小路があった可能性もあろう。
- (55) 註⑩と同じ。Ⅰ、ⅡA期の墓地は左右郭周辺の丘陵地にあり、ⅡB期には郭内の宅地内にも展開してくるとみられる。都市化と墓地規制について重要な視点をもつと思われる。
- (56) 大和における新城の遺構状況については条坊式都城の問題でふれるが、天武朝の新城との関連からは都市区画をさすとみることができる。羅城建設がまずいそがれたとすれば都市区画として必ずしも遅れた施行時点といえないであろう。
- (57) 上峰村教育委員会「堤土塁跡」1978、松村一良『日本書紀』天武七年条にみえる地震と上津土塁跡について」九州史学98 1990。上津土塁は天武7年には存在していて、修補されたとみている。両土塁とも、大宰府の羅城の築堤構造と対比されるべきものと思われる。またその機能、立地も大宰府羅城と関わるものであろう。両者で筑後平野をおさえていること、堤土塁が大宰府西方の背後地をもおさえること、上津土塁は肥後方面や鞠智城への交通路とも関わることなどがあげられる。築堤は城郭の一部とみたい。
- (58) 大宰府の24町四方の郭の北辺に府庁城があることは、平城京方式の先取りということにもなる。大野城の南麓で、御笠川が迂回した所での府城の占地条件や半島でのあり方から、新益京の方式とは異なる方式がとられたとみられ、大宰府の条坊や官衙整備が平城京以後とする根拠にはしがたい。一方羅城内の平地の中心付近に次田温泉があり、観世音寺より廻る寺跡などもみられることに注目しておきたい。

(国立歴史民俗博物館 考古研究部)

The Formation of Capital Town  
in the Japanese Archipelago  
—Centering on the Restoration of Dazaifu Town—

ABE Gihei

The country of Wa, in the central part of the Japanese Archipelago, developed into a nation called Nippon, with a centralized authority. In this process, this single nation formed more than 10 capitals or capital towns, and experienced repeated transfers. Five of the capitals had square grid planning, called the Jōbō style. These were established in imitation of the Chinese capital town system. Then, how about the other towns, and how was a whole town formed? In some cases, a town with a non-Jōbō system preceded that with the Jōbō system. In other cases, both systems were developed in parallel. Non-Jōbō type towns have been long regarded as secondary, but it may be thought that they indicated the actual power of the national authority, or the framework of the Japanese cities.

The formation of non-Jōbō type cities started with the Yamato-no-miyako (Japanese capital) which was established at Asuka in the Country of Yamato in the 7th century and lasted for 100 years.

The palace, residences of powerful chiefs, temples, gardens and ponds for banquets, and defense facilities occupied a wide area. After the 650s, main defense facilities including mountain castles seem to have been established in the territory.

The most typical town equipped with these defensive facilities is Dazaifu in Kyushu. Dazaifu, taking on the important features of castle towns in three countries in the Korean Peninsula, was constructed under the guidance of exiled Baekje people. The great wall (Mizuki), small wall (Shō mizuki), mountain castle, government office, and town area have so far been excavated. However, only the western part of the rampart has been discovered, and its full outlines have not been clarified. Thanks to the discovery of the Tōregi earthwork, which corresponds to the southern part of the rampart, it was found that the rampart could be restored on the eastern side as well as the western side. The inside of the rampart was called Kaku, and was divided into the left, right and south sections, facing to the north direction of the

town. In the southern section, the allotment system was adopted. In the first half of the Nara period, Suzaku-Ōji (Main Street) was established. Then in the central part of the city, a large-scale redevelopment plan was carried out in the 10th century. Since Dazaifu had a larger structure than the castle towns of the Korean Peninsular, it can be evaluated as a kind of a castle town, though it is not called a capital because the imperial court was not based there. This form of city, which made the best use of natural topography, can be used as a standard to check the non-Jōbō type castle towns in the Kinai area. It makes us reexamine the history of Japanese cities, which have been regarded as not having city walls.